

権現山城跡  
権現山石切場跡  
白石谷遺跡  
三田谷Ⅰ遺跡  
丸木舟・網代土器  
残存脂肪分析

2003.3

国土交通省出雲工事事務所  
島根県教育委員会

権現山城跡  
権現山石切場跡  
白石谷遺跡  
三田谷Ⅰ遺跡  
丸木舟・網代土器  
残存脂肪分析

2003. 3

国土交通省出雲工事事務所  
島根県教育委員会



権現山城跡全景（西から）

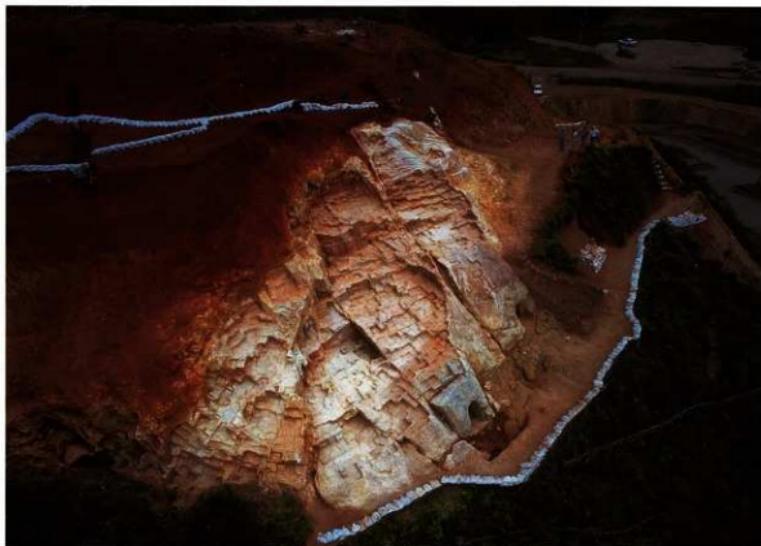


同 上（西南から）

図版②



権現山石切場跡全景（西から）



同上（西北から）

## 序

国土交通省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分に留意しつつ関係諸機関と協議しながら進められていますが、避けることができない埋蔵文化財については、事業の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では、放水路の早期完成を目指して、島根県教育委員会の御協力のもとに、平成3年度から12年度にわたり発掘調査を行ってまいりましたが、今年度の本報告書の作成をもちまして終了することとなりました。この間には、数多くの貴重な遺跡や遺物が発見され、先人の技術の高さや努力の跡を目の当たりにすることができます。これらの調査成果が、郷土の歴史教育や地域活動などに広く活用されることを願うと共に、埋蔵文化財に対するより一層の关心と御理解を得るために資料としてお役立てていただければ幸いに思います。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導・御協力いただきました島根県教育委員会ならびに関係各位に対して心から御礼申し上げます。

平成15年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所

所長 船 橋 畏 治

# 序

島根県教育委員会では、現国土交通省中国地方建設局の委託を受け、平成3年度以来、斐伊川放水路建設予定地内で遺跡の発掘調査を行ってきました。本書は平成7年度から平成9年度に発掘調査を実施した遺跡のうち、権現山城跡、権現山石切場跡、白石谷遺跡、および調査後保存処理が施されていた三田谷1遺跡出土の丸木舟等について、その調査結果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川の流れる出雲市周辺地域は、島根県内でも有数の遺跡集中地域であり、数多くの歴史的文化遺産の残っているところです。この調査によって、当地域における中近世の石切場跡、中世の山城跡、縄文時代の丸木舟の実態が明らかにされ、大きな成果をあげることができました。いずれも、この地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が地域の埋蔵文化財に対する理解や歴史学界に活用されることを期待いたします。なお、発掘調査及び本書の刊行にあたりましては地元の皆様、建設省中国地方建設局出雲工事事務所をはじめ、関係者の皆様から多くの御協力を得ましたことに対して心から御礼申し上げます。

平成15年3月

島根県教育委員会

教育長 広沢 卓嗣

## 例　　言

1. 本書は、現国土交通省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が実施した、斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書の第15集である。
2. 本書に収録したのは、次の遺跡およびその出土遺物に関する調査報告である。
  - (1) 権現山城跡・権現山石切場跡　　出雲市上塩冶町半分3, 141-2 外所在
  - (2) 白石谷遺跡　　　　　　　　　　　出雲市上塩冶町半分1, 497 外所在
  - (3) 三田谷I遺跡　　　　　　　　　　出雲市上塩冶町半分906 外所在
3. 本文Ⅰは、平成8年度に実施した権現山城跡、および同9年度に実施した権現山石切場跡の発掘調査報告である。
4. 本文Ⅱは、平成7年度に実施した白石谷遺跡の発掘調査報告である。
5. 本文Ⅲは、平成9年度に実施した三田谷I遺跡出土の、丸木舟と網代についての調査報告である。当該年度の調査報告書はすでに『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ—三田谷I遺跡(Vol. 2)』(2000.3)が刊行されているが、丸木舟は発掘現場で取り上げた後、約3カ年にわたって保存処理が行われたため、今回改めて詳細な観察記録のもとに報告することとなった。
6. 本文IVは、平成8・9年度に実施した三田谷I遺跡発掘調査検出の、SX-01に伴う土師質土器の自然科学的分析結果報告である。検出遺構および出土遺物は『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V—三田谷I遺跡(Vol. 1)』(1999.3)に既に報告されている。
7. 本書の挿図中の方位は、測量法による平面直角第III座標系(日本測地系)のX軸方向を表す。従って、磁北より7°55'、真北より0°21' 東の方向を指す。レベル高は海拔高を示す。
8. 本書の執筆はIを宮澤明久、IIを鳥谷芳雄、IIIを熱田貴保が行い、編集はIVと合わせ、宮澤、鳥谷、熱田、今岡一、秋雅人の5名が協議してこれを行った。なお、IVは帯広畜産大学生物資源科学科の中野益男氏と、㈱ズコーシャ総合科学研究所の中野寛子氏、同長田正宏氏の共同報告である。また、本書の図版作成等では、笠井文恵、人津文子、門脇由己子、来海順子の各氏の協力を得た。
9. 出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

## 本文目次

I 権現山城跡・権現山石切場跡.....	1
(1) 権現山城跡の調査.....	1
(2) 権現山石切場跡の調査.....	10
II 白石谷遺跡.....	27

1. 発掘調査の概要	27
2. 検出遺構の概要	27
3. 出土遺物の概要	44
4. まとめ	45
III 三田谷 I 遺跡の丸木舟と網代	47
1. はじめ	47
2. 丸木舟	47
3. 堅果類貯蔵穴出土の網代	50
IV 三田谷 I 遺跡出土土器残存脂肪分析	53
三田谷 I 遺跡出土土器残存脂肪分析・中野恭男・中野寛子・長田正宏	53

## 表 目 次

(権現山城跡・石切場跡)

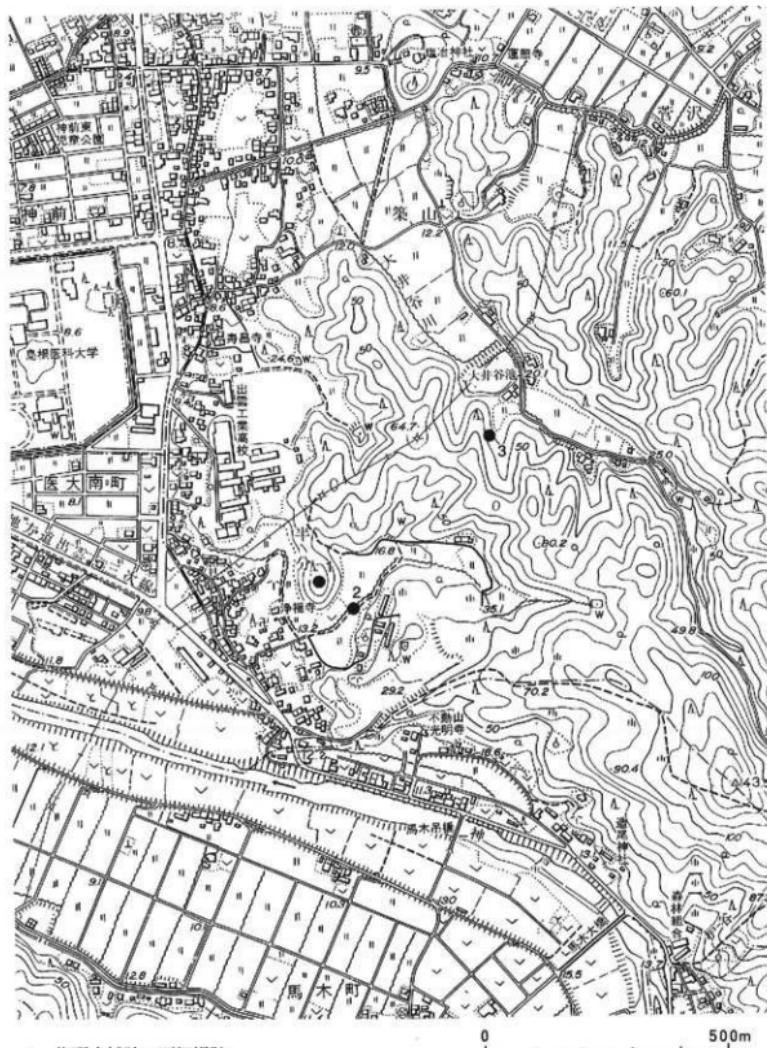
表 1 権現山城跡・権現山石切場跡出土遺物観察表	21
(自然科学的分析)	
表 1 土壤試料の残存脂肪抽出量	59
表 2 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合	59
表 3-1 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成から算出した動植物脂肪の分布割合	60
表 3-2 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成から算出した動植物脂肪の分布割合	60

## 挿 図 目 次

(権現山城跡・石切場跡)

第 1 図 権現山城跡・石切場跡地形測量図及び調査区配置図 (1:500)	3
第 2 図 権現山城跡縄張り図	4
第 3 図 権現山頂上部遺構図 (1:150)	5
第 4 図 権現山城跡・石切場跡土層図 (1:160)	7
第 5 図 主郭ピット群実測図	8
第 6 図 S B - 0 1 実測図	8
第 7 図 権現山石切場跡平面図その 1 (1:100)	13
第 8 図 権現山石切場跡平面図その 2 (1:100)	15
第 9 図 権現山石切場跡立面図その 1 (1:50)	17
第10図 権現山石切場跡立面図その 2 (1:50)	19

第11図 権現山城跡出土遺物実測図その1 (1:3)	23
第12図 権現山城跡出土遺物実測図その2 (1:3)	24
第13図 権現山城跡出土遺物実測図その3 (1:3)	25
第14図 権現山石切場跡出土遺物実測図 (1:4)	26
(白石谷遺跡)	
第1図 白石谷遺跡調査区位置図 (1:1000)	28
第2図 白石谷遺跡遺構配置図 (1:600)	29
第3図 白石谷遺跡上層図 (1:160)	30
第4図 石切場跡V平面図・立面図 (1:80)	31
第5図 石切場跡V土層図 (1:80)	33
第6図 石切場跡V断面図その1 (1:80)	34
第7図 石切場跡V断面図その2 (1:80)	35
第8図 石切場跡V断面図その3 (1:80)	36
第9図 石切場跡VI遺構図 (1:40)	37
第10図 石切場跡VII遺構図 (1:40)	38
第11図 加工段I遺構図 (1:40)	39
第12図 加工段II遺構図 (1:40)	40
第13図 加工段III遺構図 (1:40)	41
第14図 石切場跡V出土遺物実測図 (1:3)	45
第15図 白石谷遺跡出土遺物実測図その1 (2:3、1:3)	42
第16図 白石谷遺跡出土遺物実測図その2 (1:3、1:4)	43
第17図 大井谷石切場跡群石切り工程復元模式図	46
第18図 大井谷石切場跡群I～VII出土遺物実測図 (1:4)	46
(三田谷I遺跡丸木舟)	
第1図 三田谷I遺跡出土丸木舟実測図 (S=1/30)	48
第2図 三田谷I遺跡出土網代状遺物実測図 (S=1/5)	50
(自然科学的分析)	
第1図 遺構配置状況及びSX-01出土状況	61
第2図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	61
第3図 試料中に残存する脂肪のステロール組成	61
第4図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	62
第5図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相關	62



1. 榆現山城跡・石切場跡
2. 三田谷1遺跡
3. 白石谷遺跡

発掘調査対象地位置図 (1 : 10,000)

I 権 現 山 城 跡  
権現山石切場跡



# I 権現山城跡・権現山石切場跡

## (1) 権現山城跡の調査

### 1. 調査の経過

事前の地形測量図を基に7個の山輪を想定し、4月18日調査区の設定を行った。予想を超える強風におおられ前途多難な作業の開始となった。同22日から表土掘削を開始したが、頂上部はほとんど地表面が露出しているような状況であった。また、中央部には大山権現を祀った小祠が最近まであり、その礎石や屋根材などが散財していた。同26日からは大半が露出していた主郭部の礎石(つぶていし)の実測を開始したが強風による砂塵のためゴーグルを着用することもあった。

9月には主郭部のM-2・3区において大規模な柱穴らしきピットを検出したが、丘陵北側が切岸状になっていることと合わせて半分城の一部としてきたこれまでの城跡の性格に疑問が生じたため調査指導を受けることとした。9月11日に県立松江南高校の山根正明教諭に現地指導を受け、繩張り図の作成を依頼した。検出した掘立柱の建物跡を城郭関係の建物とするには位置的に疑問がある。また、北側が切岸であれば半分城とは敵対関係にあることとなる。これまでには半分城と一体の城跡として取り扱われていたが、以上のような点から別個の城郭として権現山城跡と呼称することとした。

作業は、主郭部から始め、丘陵頂上部の周辺へと拡げていった。9月30日には上塙治横穴群第28支群の上部にトレンチを入れ、城郭と石切場、横穴群の層序から遺構の時期差を確認することとした。堆積土に白い石屑が多量に含まれていたW3区(西3郭)は石切りによるものであることが判明した。

10月2日には、京都府大山崎町歴史資料館福島克彦氏に現地指導を受けた。周辺の城跡の状況をもっと詳細に踏査して把握しなければ性格付けは難しいとの指導を受けた。

10月24日に空中写真撮影を実施して現地調査を終了した。

調査担当者は、宮澤明久(埋蔵文化財調査センター主幹)、安部清志(同教諭兼文化財保護主事)、柴崎香織(同臨時職員)が当たり、鳥根大学渡邊直幸、県立松江南高校山根正明、京都府大山崎町教育委員会福島克彦、鳥取環境大学浅川滋男、広島県立美術館村上勇、島根県埋蔵文化財調査センター広江耕史の各氏から指導・助言を得た。

また、押図として掲載してある第2図「繩張り図」は山根正明氏の作成によるものである。

### 2. 位置と環境

中世に入ると、出雲平野を囲む周辺丘陵には、多くの山城が築かれている。上塙治町半分に所在する半分城は、城主は不明であるが戦国期に構えられていた城である。

北方には塩治氏の山輪跡を挟んで、出雲市今市町宇鷹瀬に所在する平家丸や上塙治町向山の向山城があり、東方には上塙治菅沢に大井谷城などが所在している。南には、神門川を挟んだ丘陵に姉山城や栗柄城、渟土寺山城などが、また西に拡がる平野には古代の寺院跡が所在する神門寺があり境内には、山雲国守護塙治判官高貞の墓と伝えられる五輪塔が所在している。

この半分城跡から南に延びる丘陵の先端部分が権現山と呼ばれる小丘をなしている。

### 3. 調査の概要

権現山の山頂には、人山権現を祀る小祠が近年まで建っており、その礎石や建築部材と共に供獻用に使用されたかわらけの破片や古銭、銅貨が散在していた。

また、表土は薄く、地山の風化土層が地山の上面を覆っている程度のもので発掘は荒掘りではなく最初から造構の精査をしているような状態であった。

想定される7個の曲輪のうち頂上部のものは北側から南側へ主郭、南1郭、南2郭、南3郭、西側のものは北側から南側へ西1郭、西2郭、西3郭と呼称することとした。

発掘に着手する前に土層観察用と発掘用地区割りのための畦を予め設定した。丘陵上の主郭から南2郭、南3郭のほぼ中心部を南北に継続する畦を主軸として設定し、それと直交する東西の畦を設定した。

### 4. 造構

#### 主郭

頂上部は、大きな段差による面ではないが、曲輪として捉えると面としては3ブロックに分けることができる面であり、北から主郭、南1郭、南2郭と区分けした。

主郭は、丘陵頂上部の最頂部にあたり、丘陵の北端部分にある東西13m、南北24mの範囲である。

①切岸 平坦部の北側は崖面となっており、丘陵北側の半分城跡との往来を遮断するが如くなっている。崖の断面を掘り下げたところ1.5mに及ぶ盛り土が確認できた。人工的な切岸を造作したものと考えられる。

②土塁 その崖上の平坦部には北端に沿って幅0.5~1.2mで僅かな盛り上がりを持つ長さ5mにおよぶ盛土部分があり土塁状をなしていた。

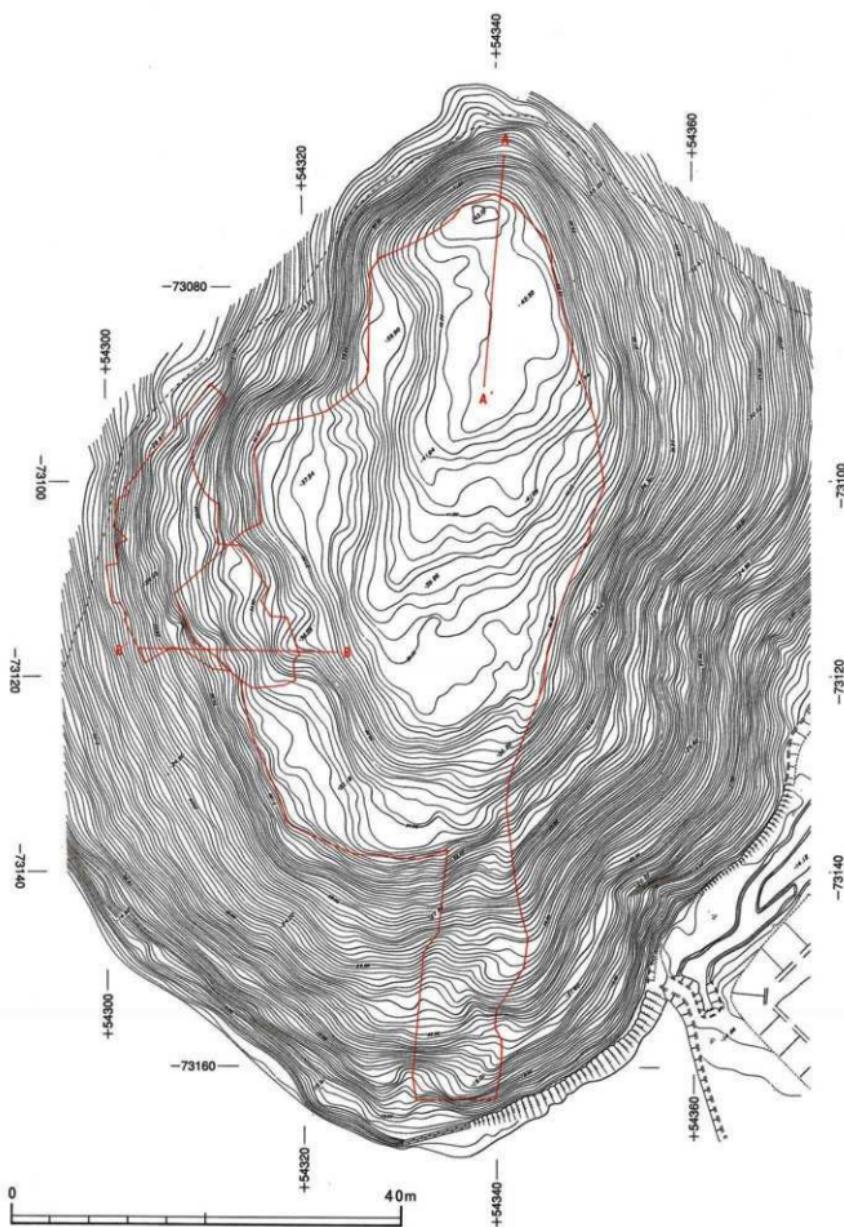
③礫石 土塁の東側端部付近には拳大の砾石が東西10m、南北6mの範囲に集積していた。その数は750個を越え、戦闘に備えた砾石(つぶていし)と考えられる。

④ピット群 主郭部の平坦面に大小21個のピットを検出した。比較的規模が大きく深さも深く2段掘りになっているものと、規模が小さく浅いものとに大別される。

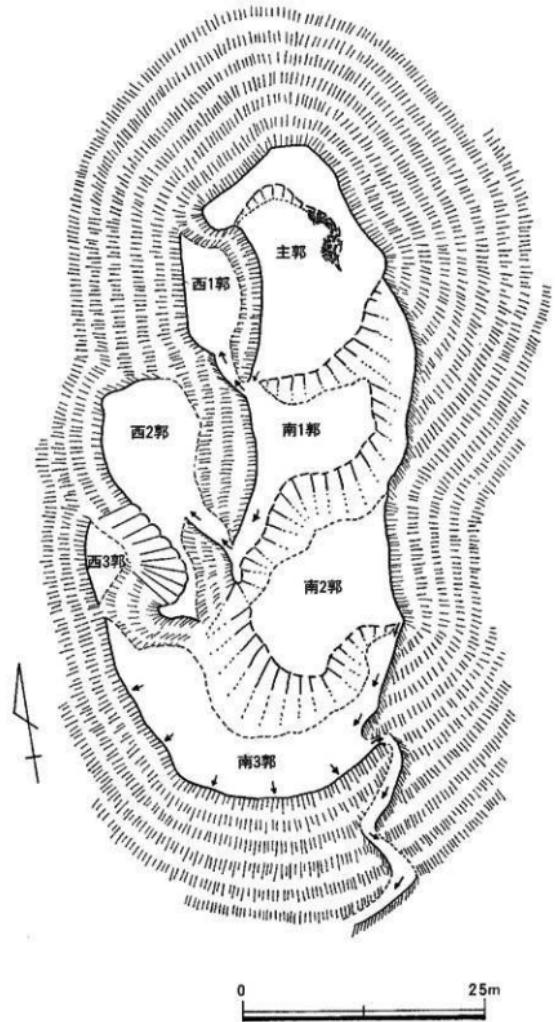
規模などは表のとおりであるが、2段掘りとしているのは中心部に一段と深くなった柱根跡ともいえる痕跡を持ったものである。

主郭部ピット一覧

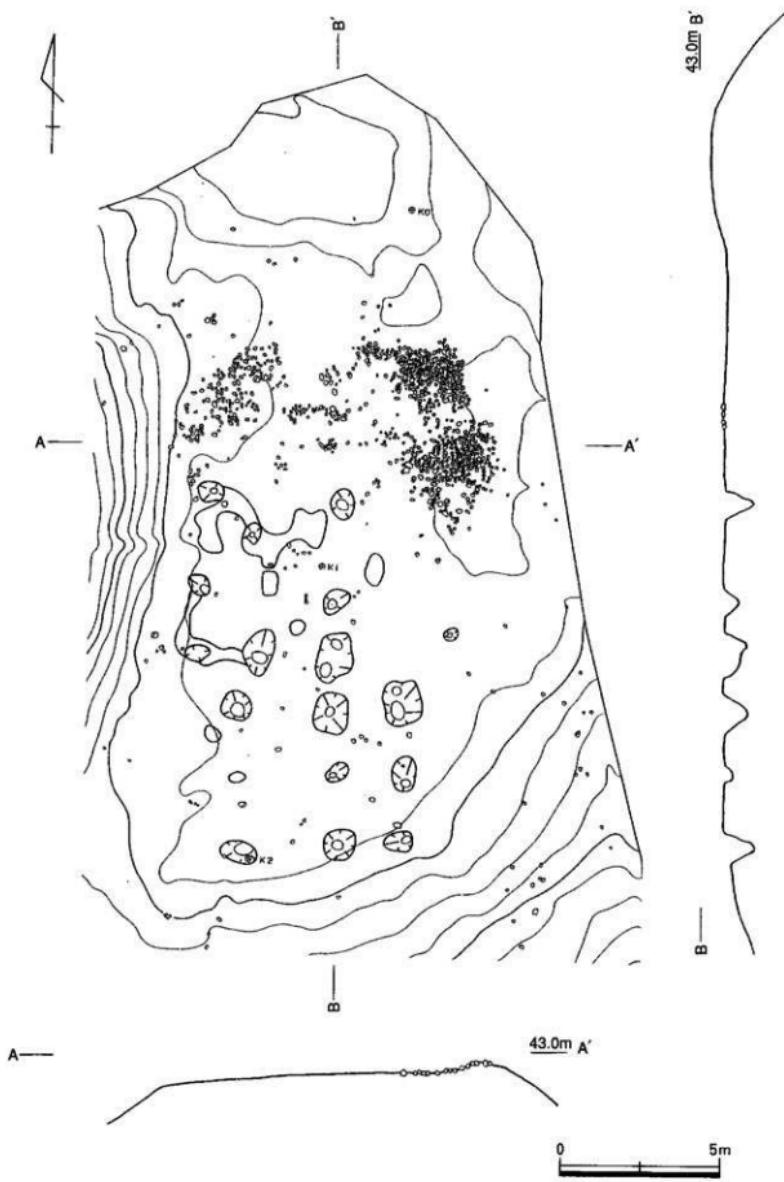
No.	上面(長径×短径)cm	深さcm	平面形態	備考
0 1	1 0 0 × 6 2	1 1 5	橢円形	2段掘り
0 2	1 5 0 × 1 1 6	5 0	隅丸長方形	2段掘り
0 3	1 0 5 × 9 2	7 4	隅丸方形	2段掘り
0 4	7 8 × 6 2	7 1	隅丸方形	2段掘り



第1図 横現山城跡・石切場跡地形測量図及び調査区配置図 (1 : 500)



第2図 権現山城跡縦張り図



第3図 検査山頂上部遺構図 (1 : 150)

0 5	1 5 2 × 1 0 8	8 6	隅丸長方形	2段掘り
0 6	5 6 × 5 5	1 4	円形	
0 7	1 4 4 × 1 1 5	1 0 0	隅丸長方形	2段掘り
0 8	9 4 × 5 7	1 9	不整形	
0 9	9 9 × 7 3	8 9	隅丸長方形	2段掘り
1 0	9 5 × 6 7	1 0 3	不整円形	2段掘り
1 1	1 3 8 × 1 0 8	5 0	不整円形	2段掘り
1 2	8 5 × 6 4	7 1	不整形	
1 3	8 7 × 5 4	7 5	隅丸長方形	2段掘り
1 4	1 1 1 × 6 1	7 2	隅丸長方形	2段掘り
1 5	7 6 × 4 2	3 1	不整形	
1 6	8 8 × 6 4	7 2	隅丸方形	2段掘り
1 7	1 1 8 × 9 3	9 2	隅丸方形	2段掘り
1 8	4 6 × 4 4	3 0	円形	
1 9	4 7 × 3 0	1 8	不整円形	
2 0	5 0 × 5 0	2 5	円形	
2 1	1 1 0 × 6 5	7 8	隅丸長方形	2段掘り

#### ⑤ S B01

P01・P02・P11・P10・P04・P13・P09から構成される東西2間(400cm)×南北2間(500cm)の掘立柱の建物跡と考えられる。大規模な柱穴様ビットが含まれるが正確な規格性のある配置にはならず、上部構造等については不明である。

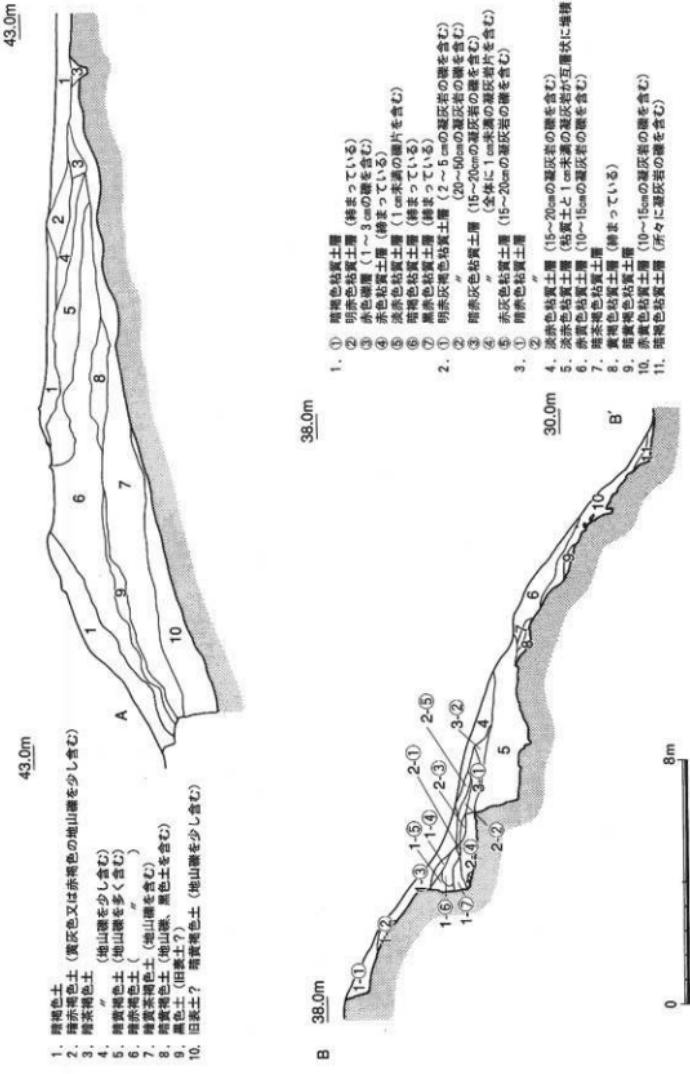
#### ⑥ S B02

P03・P07・P14・P16・P17・P21・P19・P05・P15から構成される東西2間(500cm)×南北2間(400cm)の掘立建物跡と考えられる。S B01と同様に大規模な柱穴様ビットが含まれるが正確な規格性のある配置にはならず、上部構造等については不明である。

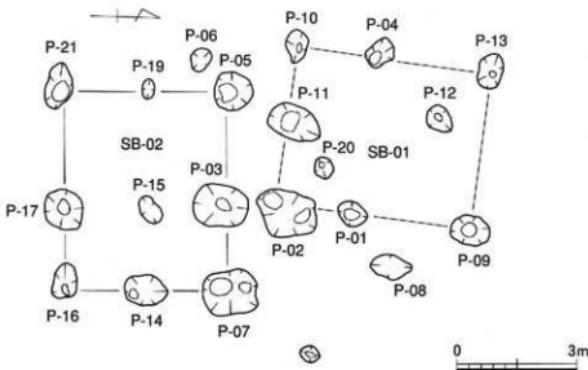
#### 郭群

主郭の南側と西側には、城郭としての機能を有していたかどうかは定かではないが郭状の平坦面が6箇所ある。

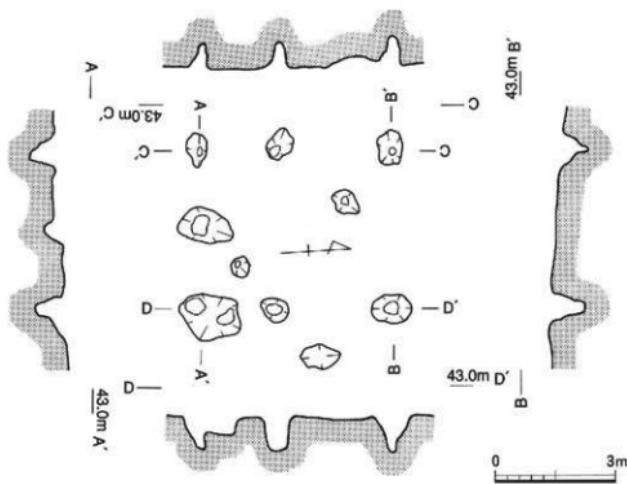
- ①南(S)1郭 主郭の南側に、主郭より一段低くなった東西13m、南北7mの平坦面がある
- ②南(S)2郭 南1郭の南側に、更に一段低くなった東西15m、南北11mの平坦面がある
- ③南(S)3郭 南2郭から南側へ下がった面である。幅6mで長さ30mほどの帯曲輪状の形状である。
- ④西(W)1郭 主郭の西側に、主郭より一段低くなった東西6m、南北11mの平坦面があり、南北に一列に並ぶ3個のビットが検出されている。北側のP01は、30×40cmの梢円形を呈し、深さは15cmを測る。南側に1m20cmほどの距離をおいてP02がある。30×30cmの円形を呈し、深さは55cmを測る。さらに南側に80cmほどおいてP03がある。25×30cmの梢円形を呈し、深さは30cmを測る。ビット列の性格は不明である。



第4図 権現山城跡・石切場跡土層図 (1 : 160)



第5図 主郭ピット群実測図



第6図 SB-01 実測図

⑤西(W)2郭　　南1郭から西側へ下がった面である。東西10m、南北15mあり、東西に一列に並ぶ4個のピットが検出されている。西側のP01は、40×55cmの楕円形を呈し、深さは20~30cmを測る。東へ120cmの距離をおいてP02がある。45×50cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。さらに東へ100cmほどおいてP03がある。径40cmほどの円形を呈し、深さは50cmにおよぶ。さらに東へ130cmの距離をおいてP04がある。径45cmの不整円形を呈し、深さは20cmほどを測る。ピット列の性格は不明である。

⑥西(W)3郭　　西2郭から南西へ下がった面で、かなり擾乱を受けていた。東西8m、南北6mの不整形な形を呈し、検出面もかなり改変を受けていた。後日の調査により石切によるものであることが判明した。

## 5. 遺物

権現山城跡から出土した遺物には、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品がある。

【土師器】　第11図1から第12図60まである。57は奈良火鉢、59は柱状高台で、それ以外は皿（かわらけ）である。

【須恵器】　第12図61・62・63であり、61は蓋杯身、62は杯、63は壺である。

【陶磁器】　第12図64から72まであり、64・65・66・68は青磁の碗で、69は朝鮮産三島、70は黒釉の美濃天日茶碗、71と72は白磁である。

【鉄製品】　第13図6から12まで、6と7は鎌、8と9は小柄、12は釘と考えられる。

10と11は用途不明である。

## 6.まとめ

本調査より以前に実施されたトレンチ調査、踏査では弥生土器が出土したとの報告があるが、所在が不明であり実見していない。

出土品は、中国製品として白磁と青磁がある。青磁の多くは外面に線描蓮弁文をもち、15世紀後半から出上が増加するものであるが、県内では広瀬町富田川河床遺跡など16世紀の遺跡からの例がある。白磁は、高台をえぐるタイプのもので15世紀のものと考えられる。

朝鮮半島産の三島があるが、京都などの例をみると16世紀に多く出土するものである。しかし、他の遺物から見ると権現山城跡は、絶じて15世紀末ごろと考えられるので、朝鮮半島に近いという立地からあるいは早い時期に入っている可能性も考えられる。

検出された遺構は、頂上部の北側に盛られた土壘状のものと頂上部の北よりの平坦面から検出された柱穴が主なものである。いずれも築造時期を特定する伴出遺物はないが土壘状の盛土は城跡の施設と考えられる。柱穴については、掘立柱建物跡としてSB01と02としているが郭における建物位置からすると城跡の施設としては考えられないとの指導を得た（註1）。しかし、出土した土器も同時期のもので16世紀ごろに山頂が利用されていたことには間違いない。

また、後日発見された松江市田和山遺跡の頂上部の柱穴の例と同様な神聖な場所を区画する柱穴列とする考え方もあるが、依代や高床建築とするには否定的な指導を得た（註2）。

中世の城跡として発掘調査を進めてきたが、松江市田和山遺跡の頂上部で検出された9本柱の建物跡の例と同様、ベースには弥生時代の遺物があるが建物遺構の時期の特定が困難であるこ

と、また大変風当たりの厳しい場所に立地しており建物が存在し得るのかという疑問も残る。

(註1) 県立松江南高校山根正明氏のご教示による。

(註2) 鳥取環境大学浅川滋男氏のご教示による。

## (2) 権現山石切場跡の調査

### 1. 調査の経過

権現山城跡西3郭は、発掘調査により細かい石屑を多量に含んだ土が堆積していることが判明した。このため郭の構造を確認するために土層観察用のトレンチを設けて発掘調査を実施した。調査の結果、権現山西側中腹に開口していた上塙冶横穴群第28文群は、地山岩盤を穿つて設けられた横穴墓であることが判明するとともに、横穴墓の玄室入口付近や横穴墓の上部の地山岩盤に切石の痕跡が認められたため(註1)、周辺には大井谷や白石谷と同様に石切場の存在が想定された。

調査対象地は斜面中腹にあり、斜面下方は工事区域外の民有地であるという制約があったため、地表面を覆う表土の掘削土は調査区内では処理できないこととなった。このため山下からの重機の進入路を設け、この道を利用して運搬車により掘削土も山下へ搬出することとした。

3月から進めていた進入路が完成した後、4月21日には権現山城跡西3郭部分の掘削から開始した。5月11日には、調査区北側部分の重機掘削が終了したので人力による精査に着手した。引き続き調査区南側の精査を進め、6月5日には図化用と記録用に空中写真撮影を実施した。7月23日には最終的な記録用の空中写真撮影を実施して現地調査を終了した。

調査担当者は、宮澤明久(埋蔵文化財調査センター主幹)、安部清志(同教諭兼文化財保護主事)、柴崎香織(同臨時職員)が当たり、島根大学渡邊貞幸、(財)大阪府文化財調査研究センター藤田憲司・小林義孝・井上智宏・山本美野甲、大阪府教育委員会尾上実・横田明、太子町立竹内街道歴史資料館鶴島隆宏、千早赤阪村教育委員会西山昌孝、揖陽文化財調査研究所古川久雄、島根県埋蔵文化財調査センター鳥谷芳雄・守岡正司・間野大水の各氏から指導・助言を得た。

### 2. 調査の概要

作業は、先ず造構面を確認しつつ、重機を調査区最奥部まで進入させることから着手した。重機による掘削、掘削土の運搬車への積込み、権現山山下への搬出という作業の繰り返しを調査員の立会のもと進めた。人力掘削による排土も重機掘削土と同様にベルトコンベアと運搬車を駆使して山下まで搬出しながらの作業となった。

精査は、調査区を大きく南北に2分割し、先ず調査区北側部分について斜面上方から下方へと進め、この区域が終わると南側部分の上方から下方へと進めた。

### 3. 遺構

石切場跡は、権現山の西側丘陵斜面にある凝灰岩帯を露天掘りした跡である。石の切り出し痕としては、 $22 \times 30\text{cm}$ 、 $26 \times 28\text{cm}$ 、 $32 \times 37\text{cm}$ 、 $36 \times 46\text{cm}$ などの様に方形に近いもの、または $40 \times 105\text{cm}$ 、 $22 \times 70\text{cm}$ などの様な長方形の痕跡が残っている。

切り出し方法は、近隣の石切場の場合と同様にツルハシ状工具で周囲に溝を切り、その後手前側に鉄製のヤ（クサビ）を打ち込んで切り離すもので、ツルハシ状工具やヤの痕跡が認められた。ヤの痕跡は、幅2.5～2.8cmのものと3.5～3.8cmのものに大別され、長さは3～8cmと様々で、間隔は11～16cmであった。例えれば、幅105cmで長さ（奥行）40cmの切り出し痕では、6個のヤ跡が残っていた。ヤは、岩盤に対してほぼ水平に打ち込まれていた。

3×5m～6×7mぐらいの範囲を一つの区画として斜面下方から上方へと階段状に切り出しを進めており、全てで16区画ぐらいに分けることができる。斜面下方から上方へと切り出していく工程は、大阪府太子町の楠木石切場跡でも堆積上層の観察結果などから報告されている（註2）。

#### 4. 遺物

櫛現山石切場跡からは、石製品と鉄製品が出土している。

〔石製品〕 第14図に主なもの実測図を掲載したが、全て五輪塔の未成品と考えられる。1・2・3・4・5は空風輪、6・7は火輪で、8は水輪の未成品と考えられる。9・10は切り出しあまの状態に近い石材である。

隣接する上塩治横穴墓群第33支群からは、五輪塔や宝篋印塔などの部材が99個で出土しているが、規格などはこれらに近いものである（註3）。

6と7の火輪は、かなり成品に近い段階まで仕上げた時点での破損品と考えられる。成品に近い未成品が出土しており、石を切り出すとともに加工場としても使用されていたものと考えられる。

〔鉄製品〕 第13図1から5まである。1と2は刀子、3と4は玄翁、5は刀子の柄と考えられる。石の切出しや加工に用いられていたかどうかは不明である。

#### 5.まとめ

採石の工程には、「口開け」→「先山」→「荒切り」という流れがある。「口開け」は、表土を剥がして岩盤を露山させ、石材として適さない石質部分を除去する作業。「先山」は、岩盤から石材を切り出す作業。「荒切り」は、岩盤から切り出した石材を必要な大きさまで人斧で削る作業である（註4）。

第4図は櫛現山城跡から石切場跡に設けた上層観察用のベルトの図である。5層では粘質土と凝灰岩の石屑とが互層状に堆積しており、通常の遺跡における覆土の状況とは異なっていた。地表面を覆っていたと考えられる粘質土が下層にあり地山切削の石屑が上層に堆積しているという逆転現象は、一連の石切作業が斜面下方から上方へと進められたことによるものと判断された。

西側に谷を挟んで立地する丘陵の上塩治横穴群33支群からは五輪塔の成品が出土しているが、規模的にもほぼ一致するので櫛現山から切り出して加工し供給された可能性が高い。国東半島の例とは異なり、楠木石切場跡の例と同様に1石材=1製品として切り出し作業が進められていたと考えられる。

石の切り出しに併せて加工もこの場で行われたと考えられるが、大井谷石切場跡のような工具を手入れする鍛冶スペースや作業員の休憩スペース（註5）は勿論、加工のための作業場を示すような痕跡も認められなかった。

33支群の五輪塔群は、中世末から近世初頭頃のものと考えられており、権現山が城として使用された後に石切りが営まれたものと考えられる。

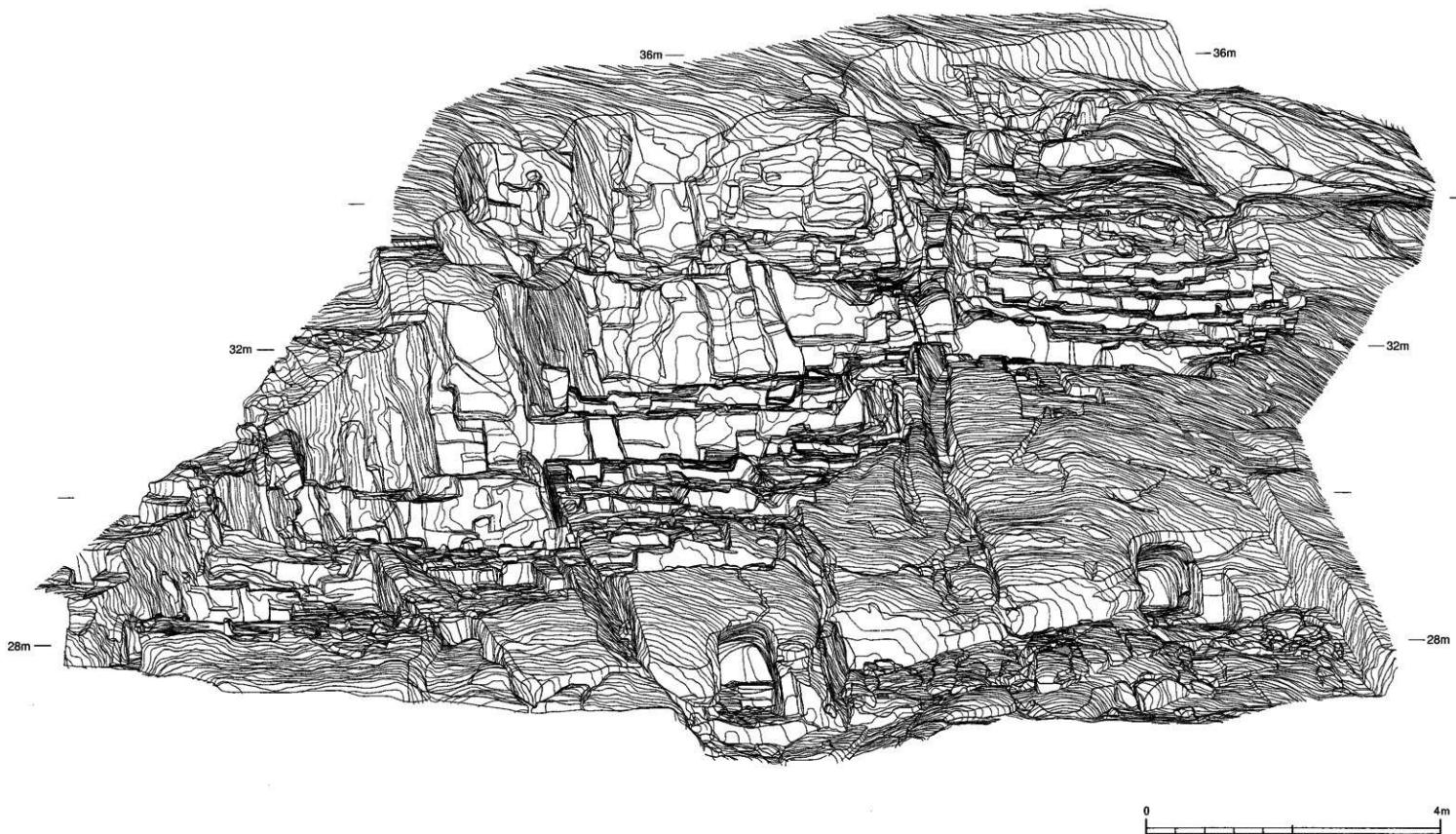
- (註1) 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ『上塙治横穴墓群第28支群』島根県教育委員会 1999
- (註2) 南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書『楠木石切場跡』(財)大阪府文化財調査報告書第37集 1998
- (註3) 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV『上式II遺跡・狐廻谷遺跡・大井谷城跡・上塙治横穴墓群(第33支群)』島根県教育委員会 1998
- (註4) 『国東半島の石工』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第1集 1983
- (註5) 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ『大井谷石切場跡・上塙治横穴墓群第14支群・上塙治横穴墓群第15支群・上塙治横穴墓群第16支群』島根県教育委員会 1997



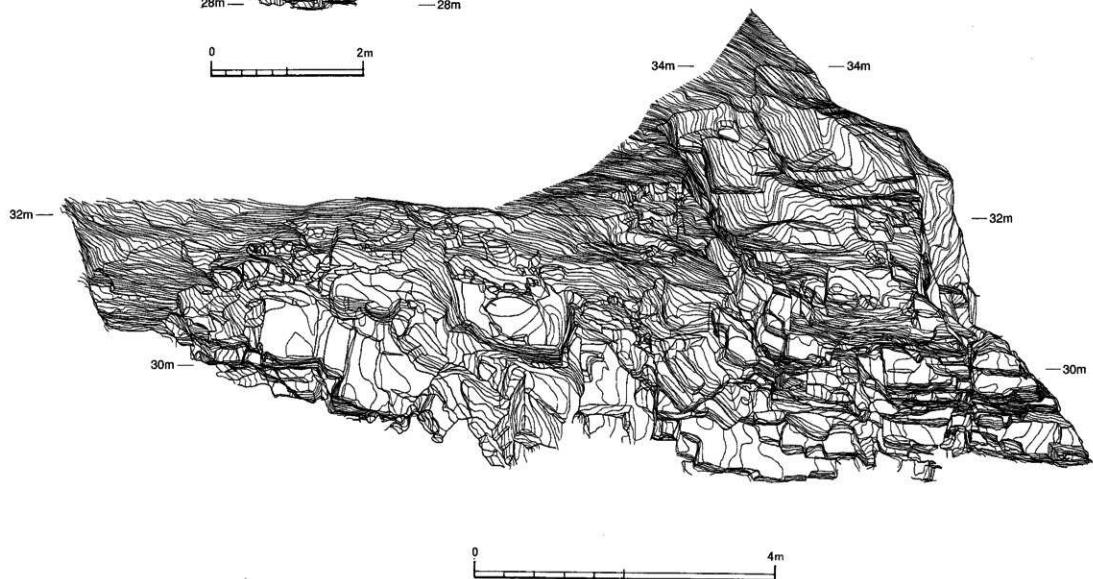
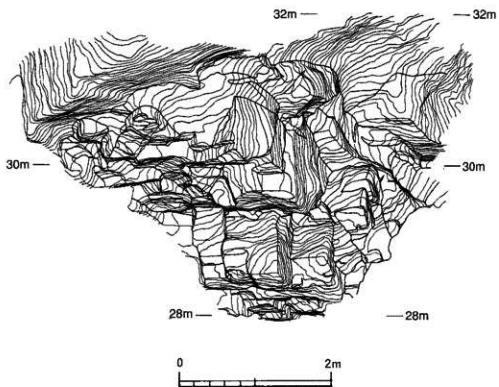
第7図 権現山石切場跡平面図その1 (1 : 100)



第8図 横現山石切場跡平面図その2 (1 : 100)



第9図 横現山石切場跡立面図その1 (1 : 50)

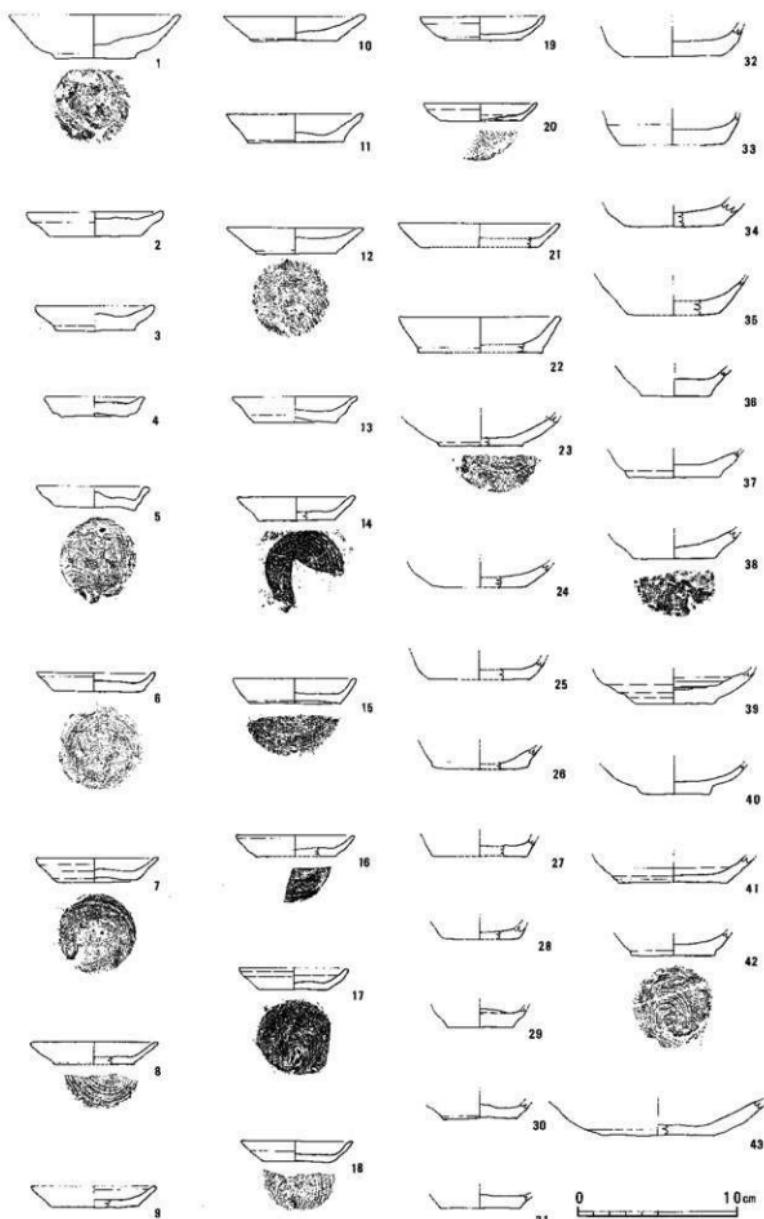


第10図 椿現山石切場跡立面図その2 (1:50)

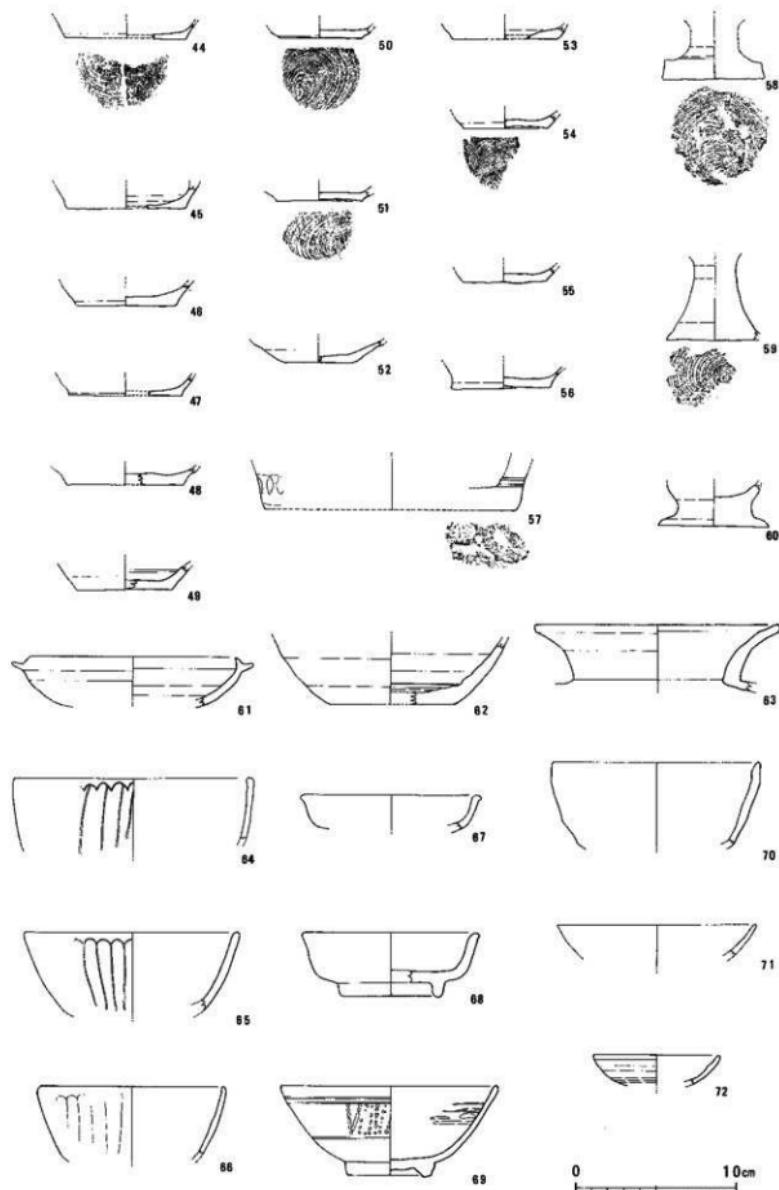
表1 権現山城跡・権現山石切場跡出土遺物観察表

整理番号	出土地点	種別	器種	器高	口径	底径	手法の特徴	色調	備考	類番
1	S 1 郡	土師器	皿(かわらけ)	2.6cm	10.6cm	5.0cm	横ナデ、回転糸切り	茶褐色		36
2	W 2 郡	土師器	皿(かわらけ)	1.5cm	8.5cm	5.6cm	横ナデ	茶褐色		43
3	W 2 郡	土師器	皿(かわらけ)	1.5	7.5cm	4.8cm	横ナデ、回転ヘラ削り のちナデ	燈茶褐色		44
4	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.2cm	6.2cm	5.0cm	回転糸切り	燈褐色		39
5	W 3 郡	土師器	皿(かわらけ)	1.5cm	6.8cm	5.0cm	横ナデ、回転糸切り	茶褐色(一部褐 黒色)		35
6	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.2cm	7.4cm	5.5cm	横ナデ、回転糸切り	淡茶褐色		2
7	表探	土師器	灯明皿?	1.4cm	7.6cm	5.0cm	ナデ、回転糸切り			1
8	S 1 郡	土師器	皿(かわらけ)	1.4cm	8.0cm	5.0cm	横ナデ、回転糸切り	燈褐色		56
9	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.25cm	7.8cm	5.5cm	横ナデ、糸切り後ヘラ 削き	茶褐色		7
10	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.5cm	8.8cm	5.4cm	横ナデ	燈褐色		25
11	M 2 郡	土師器	皿(かわらけ)	1.7cm	8.4cm	6.0cm		赤褐色(一部灰 褐色)		40
12	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.7cm	8.5cm	5.0cm	回転糸切り	燈褐色		10
13	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.6cm	7.5cm	5.2cm	横ナデ、ヘラ切り	淡黃褐色		4
14	M 2 郡	土師器	皿(かわらけ)	1.4cm	7.0cm	4.8cm	横ナデ、回転糸切り	燈褐色		59
15	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.6cm	7.8cm	5.7cm	横ナデ、回転糸切り	燈褐色		12
16	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.3cm	7.4cm	5.0cm	横ナデ、回転糸切り	燈褐色		54
17	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.3cm	6.8cm	4.3cm	横ナデ、回転糸切り	燈褐色		6
18	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.3cm	7.0cm	4.4cm	横ナデ、回転糸切り	淡黃褐色		3
19	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.4cm	7.7cm	4.7cm	横ナデ、回転糸切り	淡黃褐色		5
20	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.0cm	7.0cm	5.0cm	横ナデ、回転糸切り	燈褐色		24
21	表探	土師器	皿(かわらけ)	1.5cm	9.6cm	7.2cm	横ナデ	燈褐色		57
22	S 1 郡	土師器	皿(かわらけ)	2.2cm	10.0cm	7.6cm	回転糸切り	燈褐色		58
23	W 1 郡	土師器	皿(かわらけ)			5.0cm	横ナデ、回転糸切り	茶褐色		53
24	表探	土師器	皿(かわらけ)			6.0cm		(内) 燈褐色 (外) 暗赤褐色		28
25	表探	土師器	皿(かわらけ)			6.2cm		白褐色		17
26	表探	土師器	皿(かわらけ)			5.6cm		燈褐色		26
27	表探	土師器	皿(かわらけ)			5.8cm		燈褐色		27
28	表探	土師器	皿(かわらけ)			4.8cm	横ナデ	燈褐色		19
29	W 2 郡	土師器	皿(かわらけ)			4.0cm	横ナデ	赤褐色		41
30	表探	土師器	皿(かわらけ)			4.4cm	横ナデ	白褐色		42
31	表探	土師器	皿(かわらけ)			4.8cm	回転糸切り?	燈褐色		45
32	M 2 郡	土師器	皿(かわらけ)			6.0cm		燈褐色		37
33	表探	土師器	皿(かわらけ)			6.6cm	横ナデ	赤褐色		14
34	W 2 郡	土師器	皿(かわらけ)			6.2cm		(内) 燈褐色 (外) 暗赤褐色		32
35	表探	土師器	皿(かわらけ)			6.0cm	横ナデ	燈褐色		15

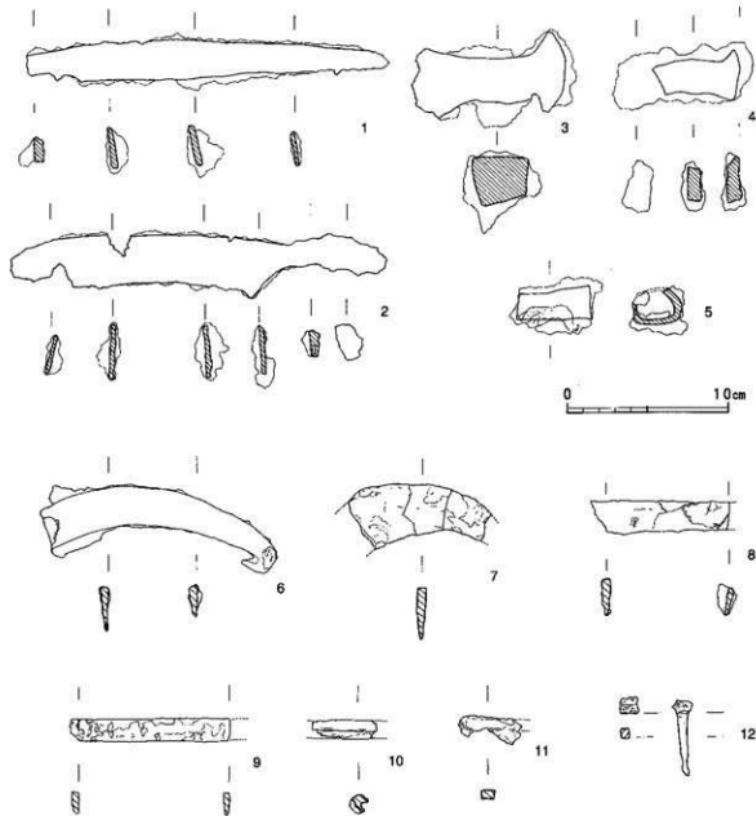
36	表採	土師器	皿(かわらけ)		4.4cm	横ナデ、ヘラ切り	煙褐色	8
37	W 2 郡	土師器	皿(かわらけ)		5.8cm	回転糸切り	煙褐色	29
38	S 2 郡	上師器	皿(かわらけ)		5.0cm	回転糸切り	煙褐色	52
39	W 2 郡	上師器	皿(かわらけ)	1.9cm (破損)	9.8cm 4.8cm	横ナデ、回転糸切り	煙褐色	30
40	S 2 郡	上師器	皿(かわらけ)		4.3cm			71
41	S 2 郡	上師器	皿(かわらけ)		6.4cm		煙褐色	46
42	S 1 郡	上師器	皿(かわらけ)		5.2cm	横ナデ、回転糸切り	煙褐色	38
43	M 3 郡	上師器	皿(かわらけ)		8.0cm	横ナデ、回転ヘラ削り	茶褐色	48
44	表採	土師器	皿(かわらけ)		7.6cm	横ナデ、回転糸切り	茶色	18
45	表採	土師器	皿(かわらけ)		7.2cm	横ナデ	煙褐色	21
46	表採	土師器	皿(かわらけ)		6.0cm	横ナデ、ヘラ切り	赤褐色	9
47	表採	土師器	皿(かわらけ)		7.0cm		茶褐色	55
48	S 2 郡	土師器	皿(かわらけ)		7.2cm		煙褐色	51
49	表採	土師器	皿(かわらけ)			横ナデ	煙褐色	13
50	表採	土師器	皿(かわらけ)		5.1cm	横ナデ、回転糸切り	(内) 煙褐色 (外) 暗煙褐色	20
51	表採	土師器	皿(かわらけ)		5.2cm	回転糸切り	暗煙褐色	47
52	W 1 郡	土師器	皿(かわらけ)		4.0cm	回転糸切り	煙褐色	49
53	表採	土師器	皿(かわらけ)		6.5cm	横ナデ	(内) 煙褐色 (外) 明煙褐色	22
54	表採	土師器	皿(かわらけ)		5.2cm	横ナデ、回転糸切り	茶褐色	16
55	表採	土師器	皿(かわらけ)		6.2cm	横ナデ、回転糸切り	煙褐色	11
56	表採	上師器	皿(かわらけ)		5.0cm	横ナデ	煙褐色	23
57	W 1 郡	上師器	火鉢	15.6cm		横ナデ、印版文様あり	黄褐色	奈良火鉢 34
58	W 2 郡	上師器	皿(高台付)		6.2cm	横ナデ、回転糸切り	煙褐色	31
59	S 2 郡	上師器	柱状高台		5.2cm	横ナデ、回転糸切り	煙褐色	50
60	S 1 郡	上師器	皿(かわらけ)		5.6cm	横ナデ	赤褐色	33
61	W 2 郡	須恵器	壺环身	15.0cm		回転ナデ	青灰色	60
62	S 3 郡	須恵器	壺		7.1cm	回転ナデ	暗青灰色	61
63	M 4 郡	須恵器	壺	15.2cm		回転ナデ	暗青灰色	62
64	W 2 郡	青磁	碗	15.0cm		青釉、蓮弁文	暗緑色	67
65	M 4 郡	青磁	碗	13.6cm		青釉、蓮弁文	緑灰色	65
66	W 2 郡	青磁	碗	11.8cm		青釉、蓮弁文	緑灰色	68
67	W 2 郡	磁器	皿	(2.0) (破損)	11.2cm	施釉	明緑色	70
68	W 2 郡	青磁	碗	3.9cm 10.4cm	6.2cm	施釉	財経色	64
69	S 3 郡	陶器	碗	5.5cm 13.4cm	5.2cm	施釉、南漢文	薄緑灰白色	三島 63
70	M 2 郡	磁器	天目茶碗	5.0cm 13.0cm		黒釉	煙褐色	72
71	S 2 郡	白磁	碗		12.4cm	白釉	白色	66
72	W 1 郡	白磁	碗		7.8cm	施釉	暗灰白色	69



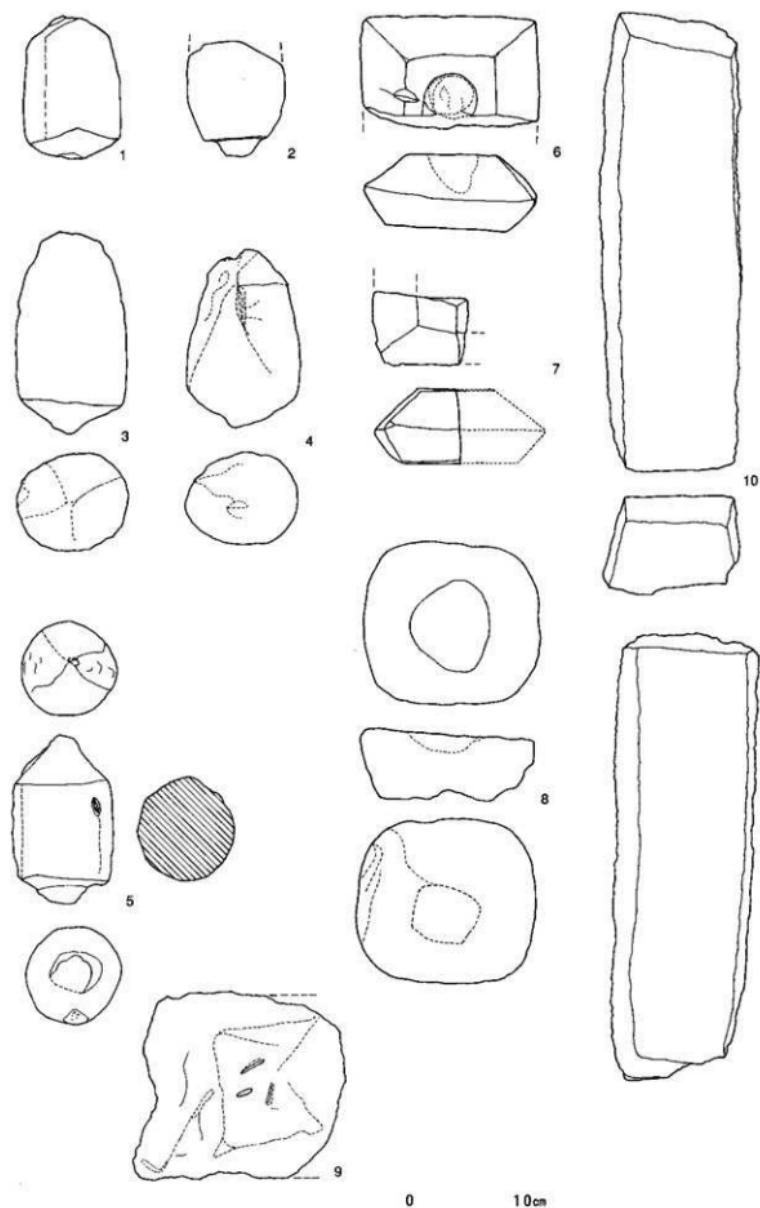
第11図 横現山城跡出土遺物実測図その1 (1 : 3)



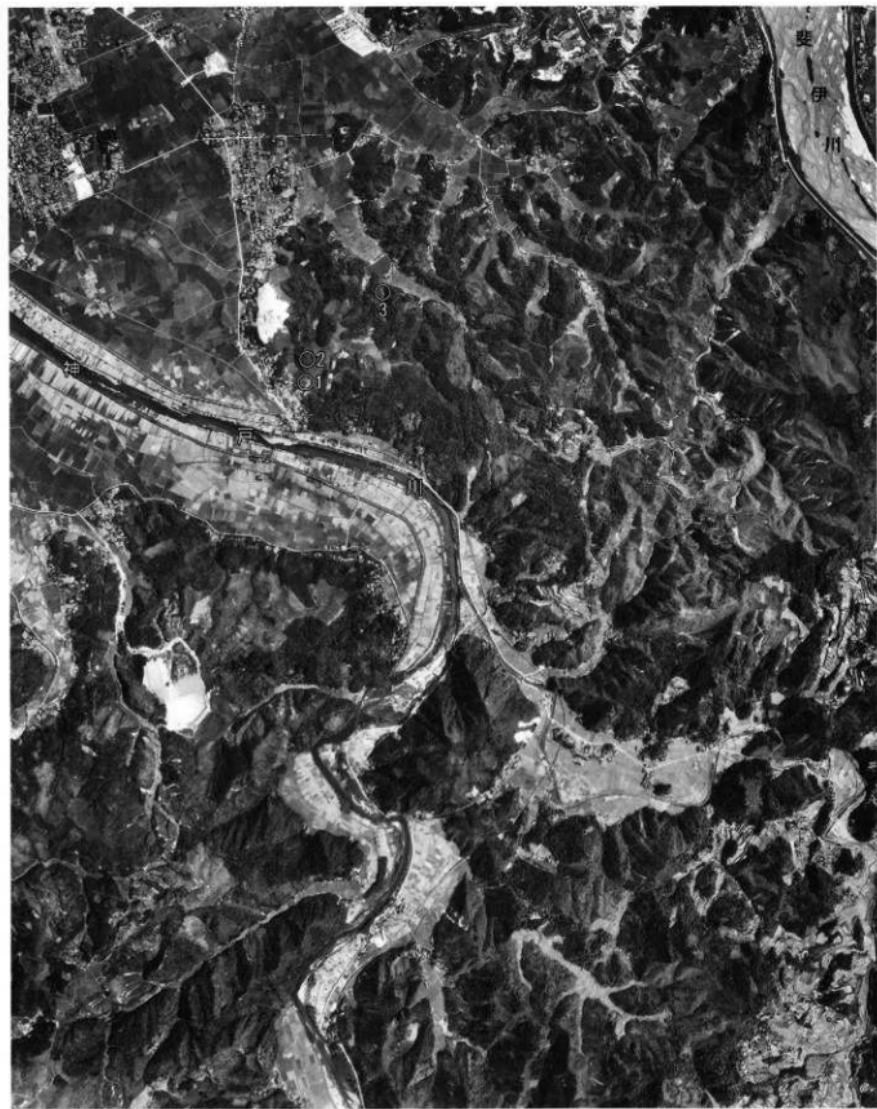
第12図 梅現山城跡出土遺物実測図その2 (1 : 3)



第13図 権現山城跡出土遺物実測図その3 (1 : 3)



第14図 梶原山石切場跡出土遺物実測図 (1 : 4)



斐伊川放水路開削部周辺の空中写真  
(1962年撮影、1：三田谷I遺跡 2：権現山遺跡 3：白石谷遺跡)



椎現山遺跡調査前全景



同上



権現山城跡全景



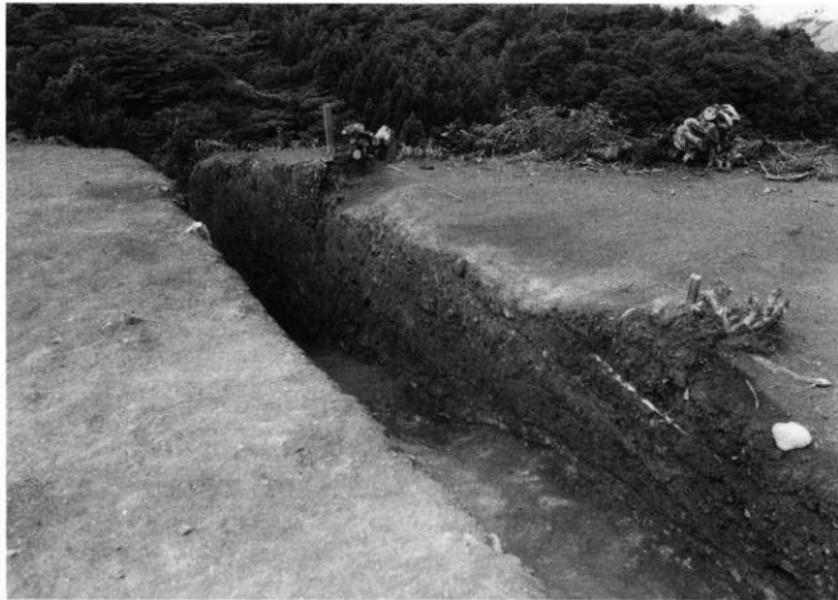
同上



主郭部（南西から）



主郭部礫石検出状況



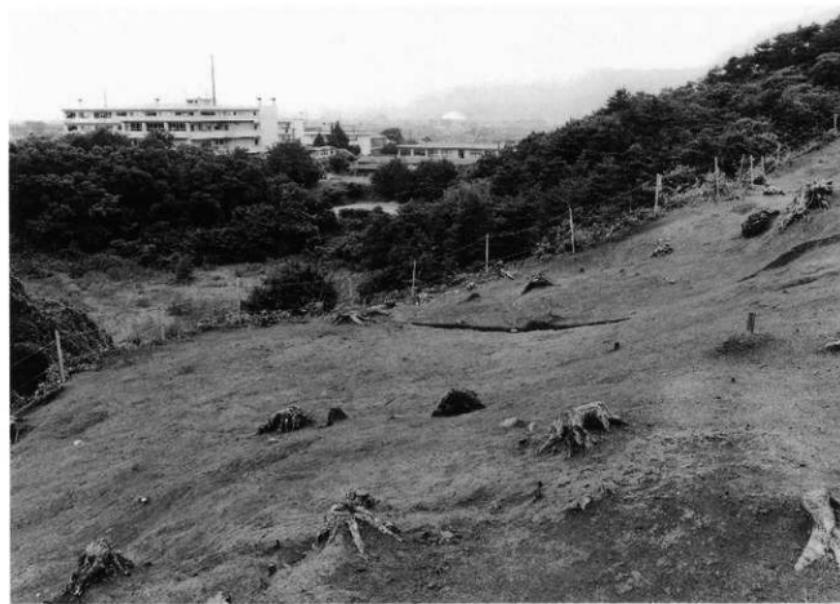
主郭部北側切岸土層堆積状況



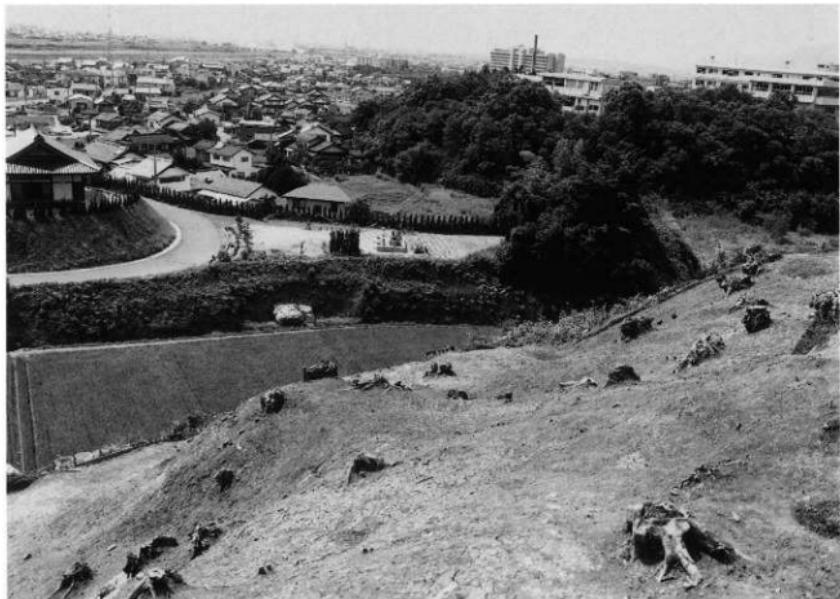
主郭部北側切岸断面



W1郭(南から)



W2郭(南から)



W3郭（東から）



W3郭（北から）



P-05



P-03



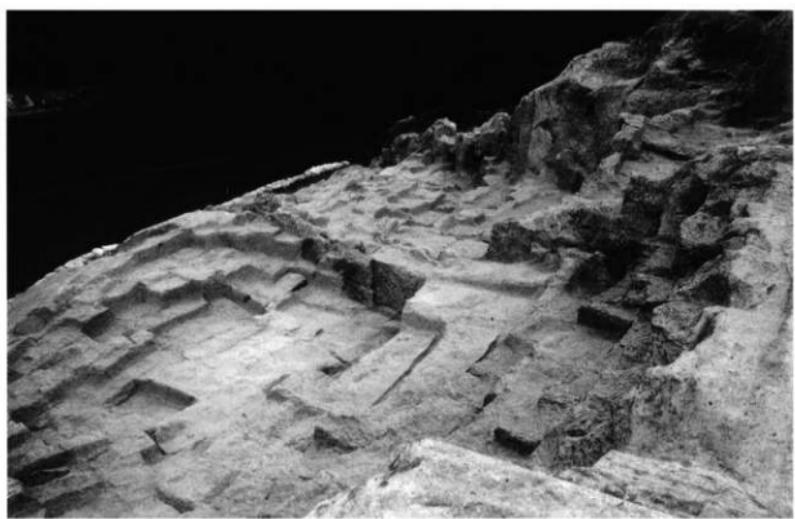
P-07



P-09



権現山石切場跡細部（西から）



同上（東から）



ヤ痕



ヤ痕



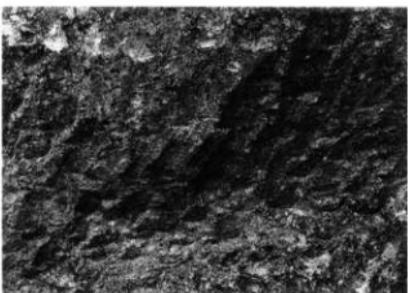
ヤ痕



ヤ痕



ノミ痕・ヤ痕



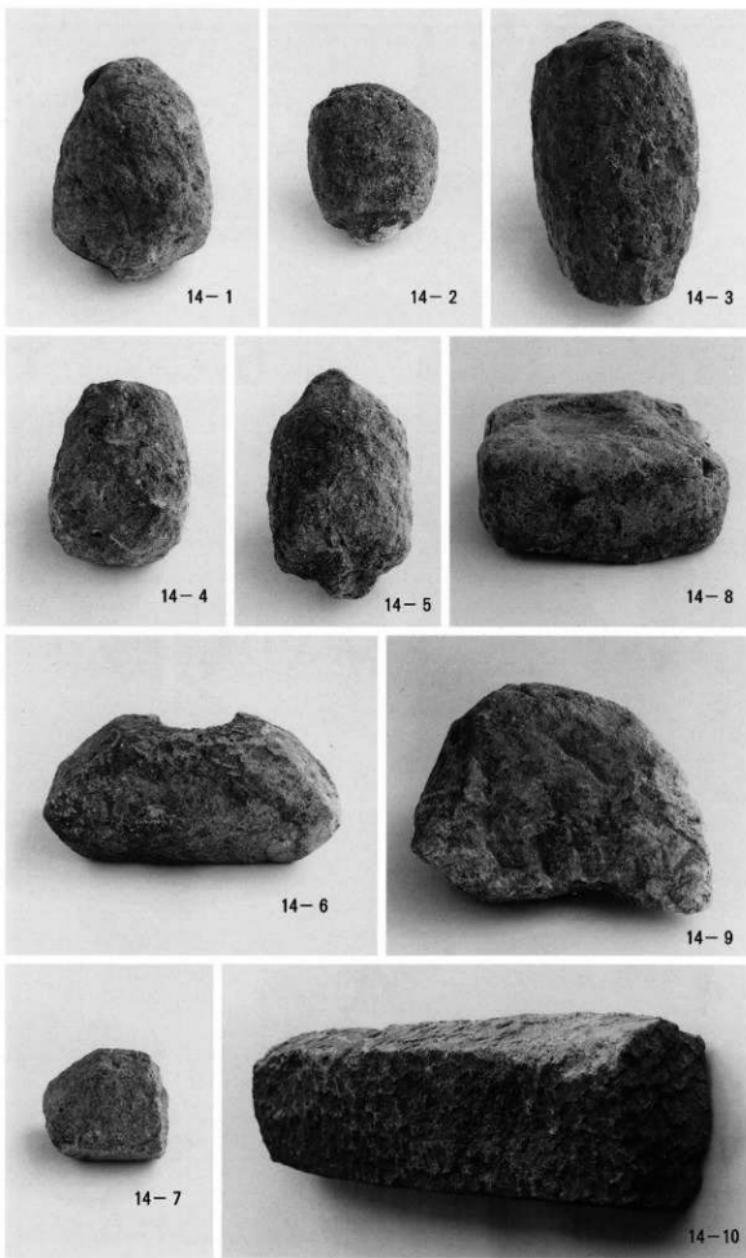
ノミ痕

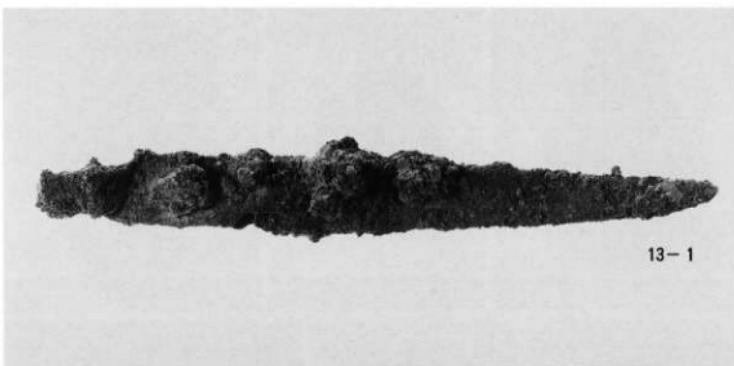


五輪塔未成品出土状況

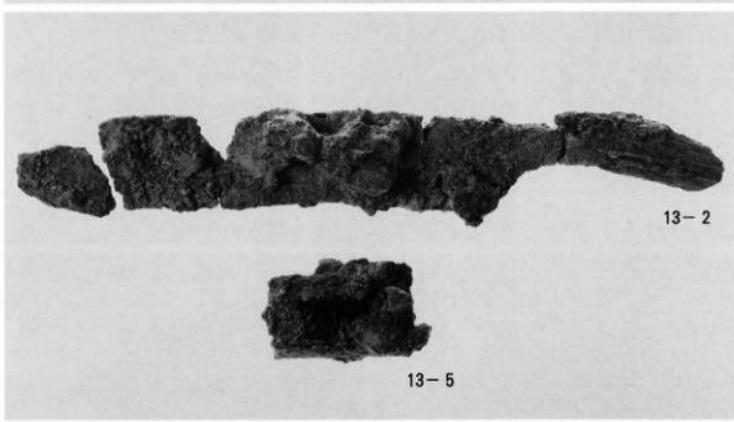


同上



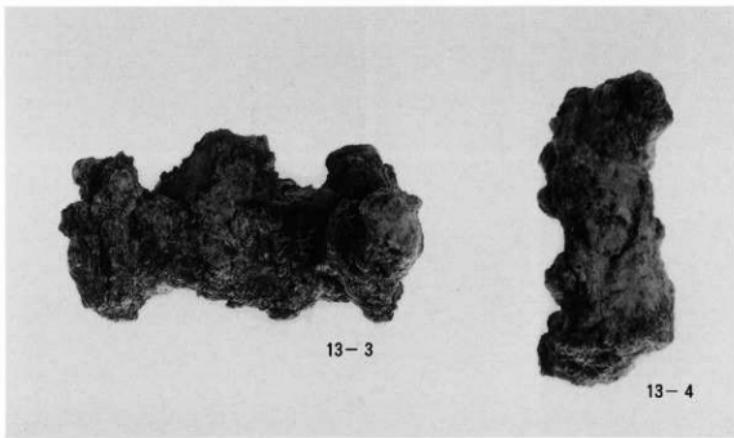


13-1



13-2

13-5



13-3

13-4

## II 白石谷遺跡



## II 白石谷遺跡

### 1. 発掘調査の概要

白石谷遺跡は、出雲市上塩谷町大井谷の中ほどに位置し、北側に伸びる小支丘陵に挟まれた谷地形中に存在する。南北方向に向く谷部の縄文～古墳時代の遺物を包含する部分と、その西側丘陵斜面の近世・近代とみられる石切場跡、および時期の特定が難しい加工段状遺構からなる、複合遺跡である。同地の北側斜面には隣接して上塩治横穴墓群第13支群が、また、南側斜面には同じ斐伊川放水路事業に伴って発掘調査した第14支群、および大井谷石切場跡群（I～IV地点）がある（第1図）。

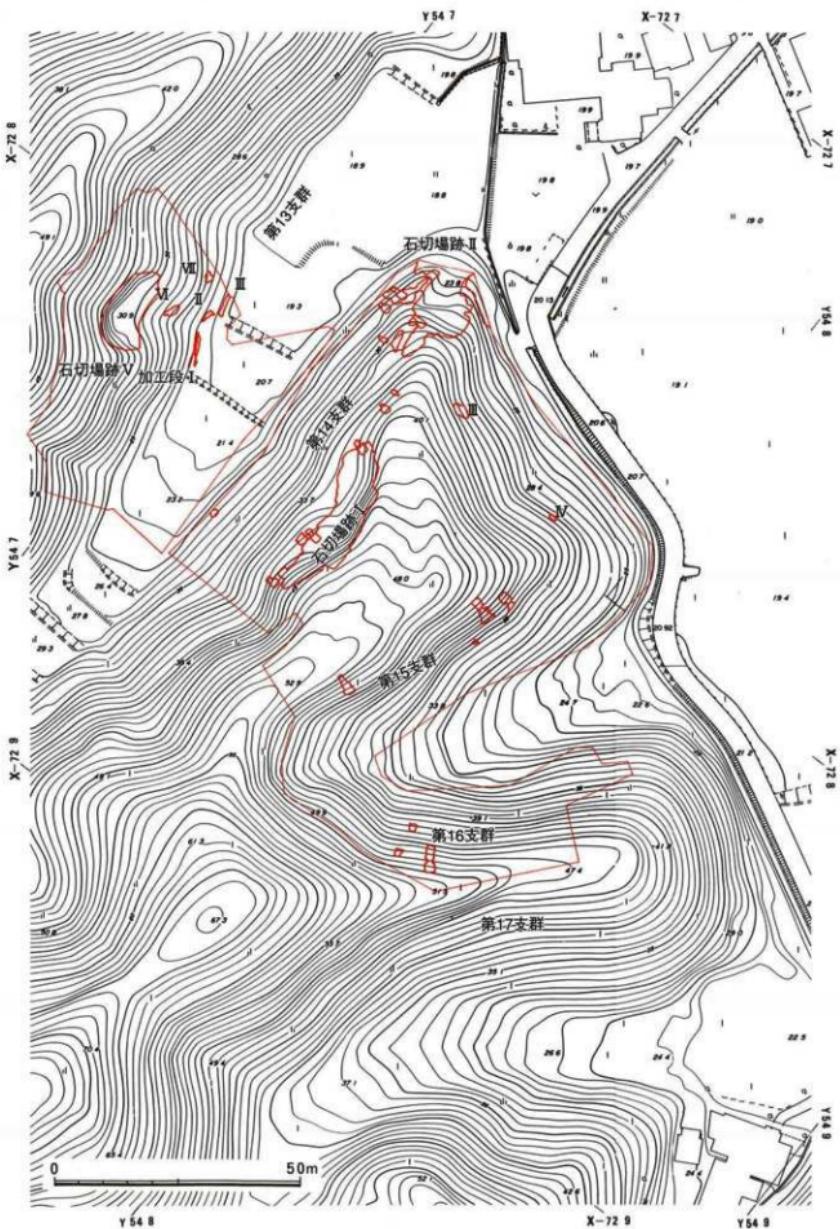
この遺跡は、斐伊川放水路建設予定地の事前分布調査で明らかになった遺跡である。遺跡名の「白石谷」はこの地点の通称であり、付近に広がる凝灰岩の白っぽい岩肌に由来すると考えられるが、後述の右切場跡で明らかなように、かってこの付近で行われていた石切にも関係してこう呼ばれていたのではないかと推察される。

本遺跡の発掘調査は平成7年度の委託事業として実施したものである。当年度においては、4月から8月初旬まで前年度からの継続であった三田谷I遺跡の調査を行い、その後白石谷遺跡の調査を行った。調査は西側の丘陵斜面に存在する石切場跡から入り、それが終了した段階で谷部の遺物包含層に着手した。12月初旬にすべての調査を終了したが、途中、石切場跡で適宜20分の1の断面図を手測りしたうえで9月には空中写真測量を行い、縮尺20分の1、5cmコンタの平面図・立面図を作成した。

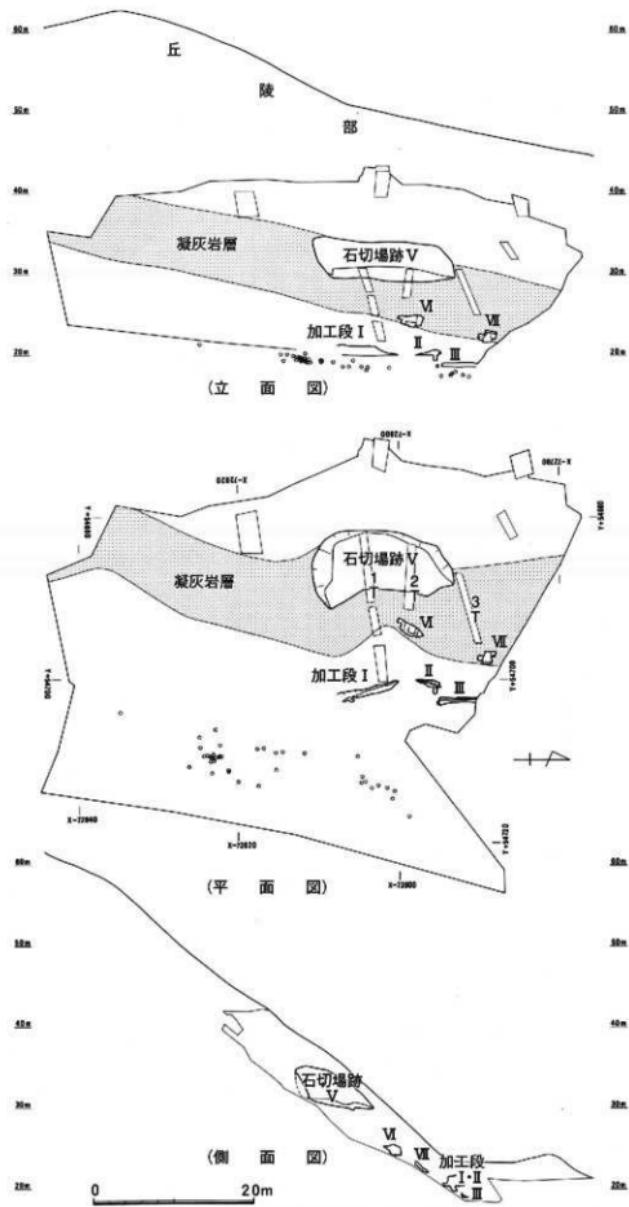
調査担当者は鳥谷芳雄（埋蔵文化財調査センター調査第2係文化財保護主事）、宮田衡（同教諭兼主事）、江角ひろみ（同臨時職員）が当たり、これに水津浩信（六日市町教育委員会、埋蔵文化財専門研修生）が加わった。また、斐伊川放水路予定地内の遺跡発掘調査はこの年度から作業員の確保等、調査の一一部に関して中国建設弘済会島根支部へ委託して実施した。当時の調査体制等、詳しくは『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX 三田谷I遺跡Vol.3』（2000.3）を参照されたい。

### 2. 検出遺構の概要

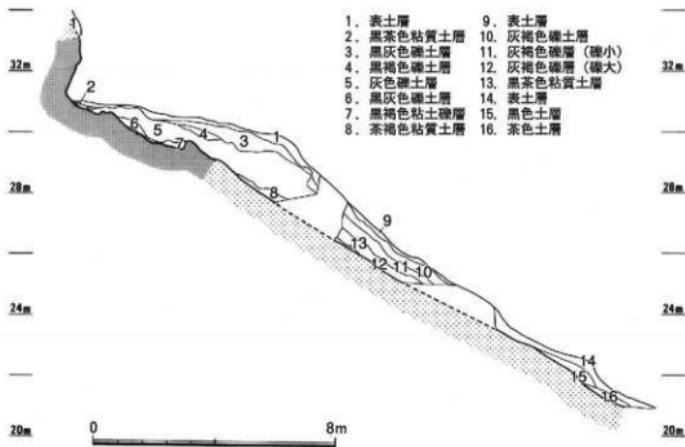
白石谷遺跡では、石切場跡3カ所、加工段状遺構3カ所、計6カ所の遺構を検出した（第2図）。石切場跡は白石谷の西側丘陵斜面にある凝灰岩帯に露天掘りした跡で、便宜的に最上位にあり、かつ、最も規模の大きい石切場跡をV地点、中程の位置にある小規模な石切場跡をVI地点、最も低い位置で最小規模の石切場跡をVII地点と呼んで調査した。なお、I～IV地点は、白石谷遺跡に先行して発掘調査した大井谷石切場跡群の地点名であり、V～VIIが存在する丘陵斜面とは谷を挟んで対面する位置にある石切場跡である。両者は同じ凝灰岩地帯（一部砂岩）の石切場跡であり、時代的にも石切技術的にも類似していることから、これらを一連の石切場跡群と見なして連続する地点名を与えた（『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III 大井谷石切場跡・上塩治横穴墓群第14・15・16支群』（1997.3）参照）。



第1図 白石谷遺跡調査区位置図 (1 : 1000)



第2図 白石谷遺跡造構配図 (1:600)



第3図 白石谷遺跡土層図 (1 : 160)

#### (1) 石切場跡V

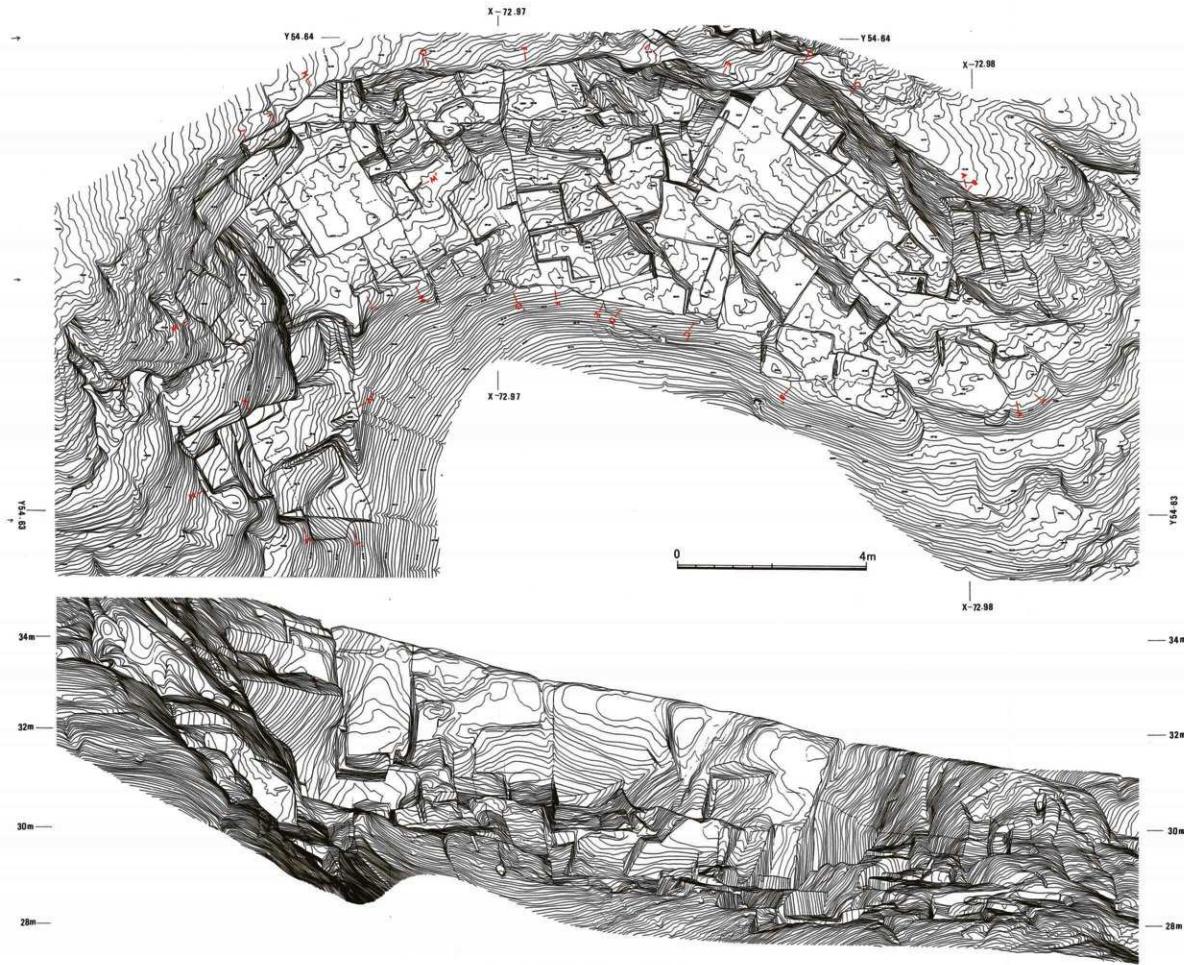
検出した3カ所の石切場跡の中では最も規模が大きく、かつ、高位置にある凝灰岩の切り出し跡である。この石切場跡は調査前から造構の一部が露呈する状態にあったため、調査ではまずこの平坦面に直交する3本のトレンチを設けて、土砂の堆積や切り出し状況を把握することとした(第3・5図)。

石切の規模は南北で最大約22m、東西で中央の幅約5m、深さは奥側でおよそ3mある。凝灰岩帯の上位半分のところにあり、切り出しの上端はこの岩盤帯のほぼ上限のラインに沿っている。いずれも方形の切り出し痕を残し、ツリハシ状工具とクサビの痕跡が認められた。切り出しの手法は復元すると、隣り合う二辺または三辺をツルハシ状工具で溝切りしたうえで底辺をクサビを打ち込んで切り離すというものである(第4・6～8図)。

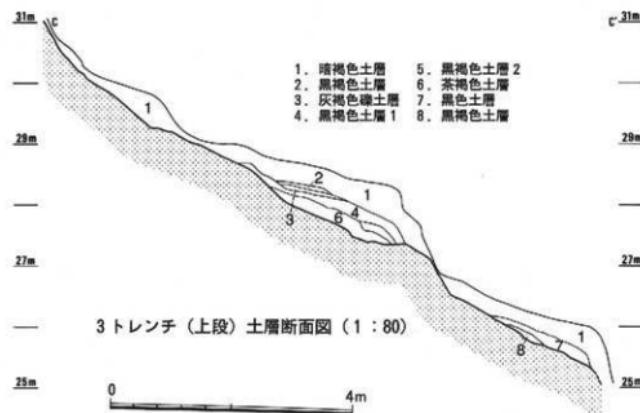
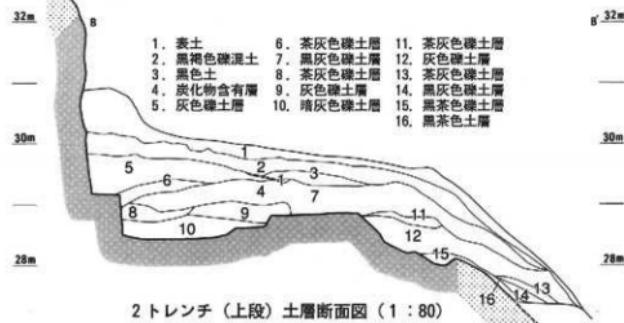
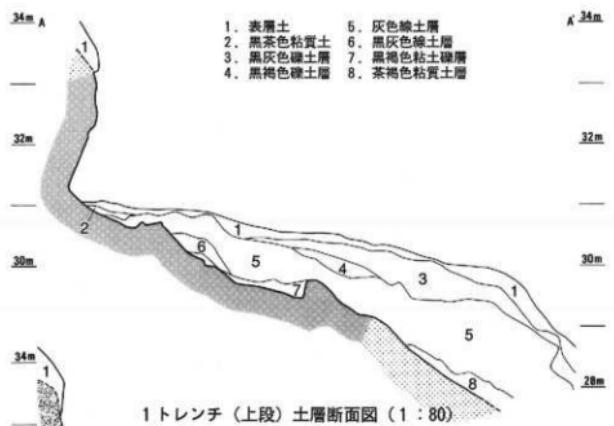
出土遺物には、堆積土層中より鉄製のヤが大小2点認められた。陶磁器類の出土がなく、時期を特定することが困難であるが、大井谷石切場跡I～IVを参考にすれば、およそ近世(遅くとも近代はじめ)の所産と考えてよいであろう。

#### (2) 石切場跡VI

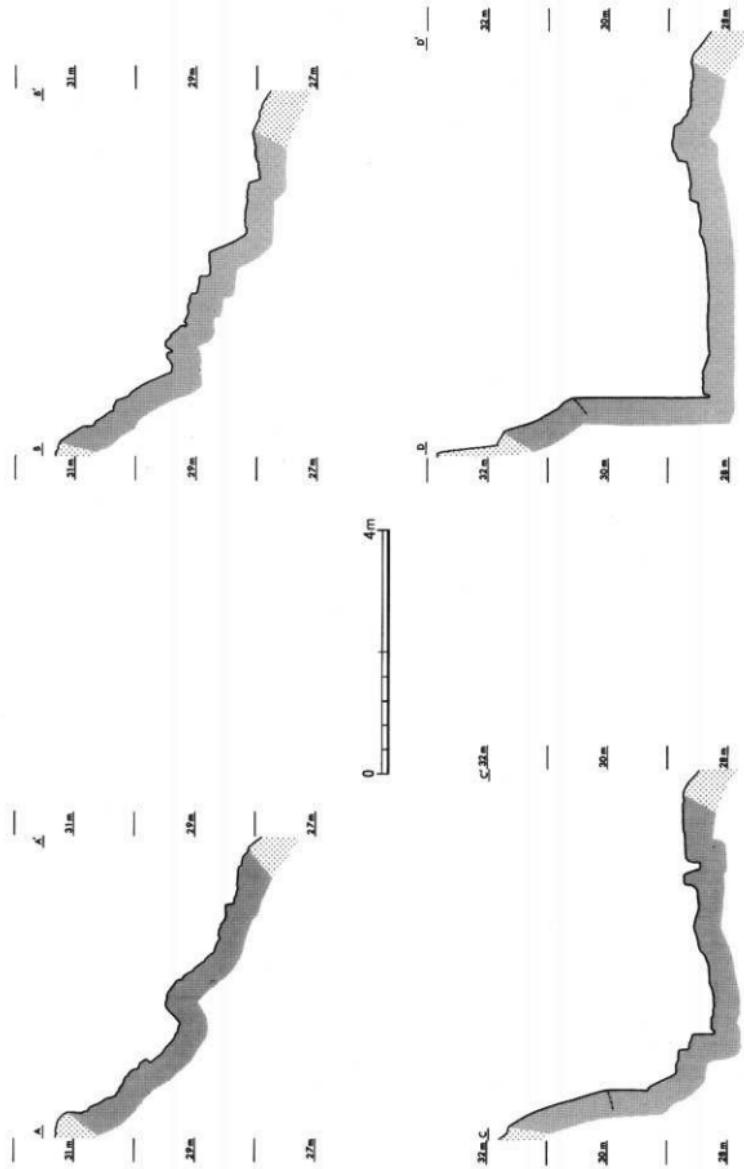
石切場跡Vの下方にあって、切り出し面は凝灰岩帯のほぼ下端に位置している。規模は南北の幅が最大で3.7m、縦方向には斜高1.5m、水平高1.2mほどと小規模で、岩盤に対してほぼ垂直方向に穿たれた跡が残る(第9図)。両サイドに比べ中央が深く彫り込まれ、深さは岩盤面に対して最大0.7mほどである。判明する限り方形の切石の切り出し跡で、その大きさは80cm四方ほどである。切り出し方法は石切場跡Iと同様、ツルハシ状工具で周囲に溝を切り、その後手前側にヤを打ち込んで切り離すもので、ツルハシ状工具とヤの痕跡が認められた。出土遺物はなく、時期は特定できないが、その切り出し手法からみておよそ近世のものと考えてよいであろう。また、北側では不規則な摺理面がみられ、小規模は石切で終わったと考えられる。



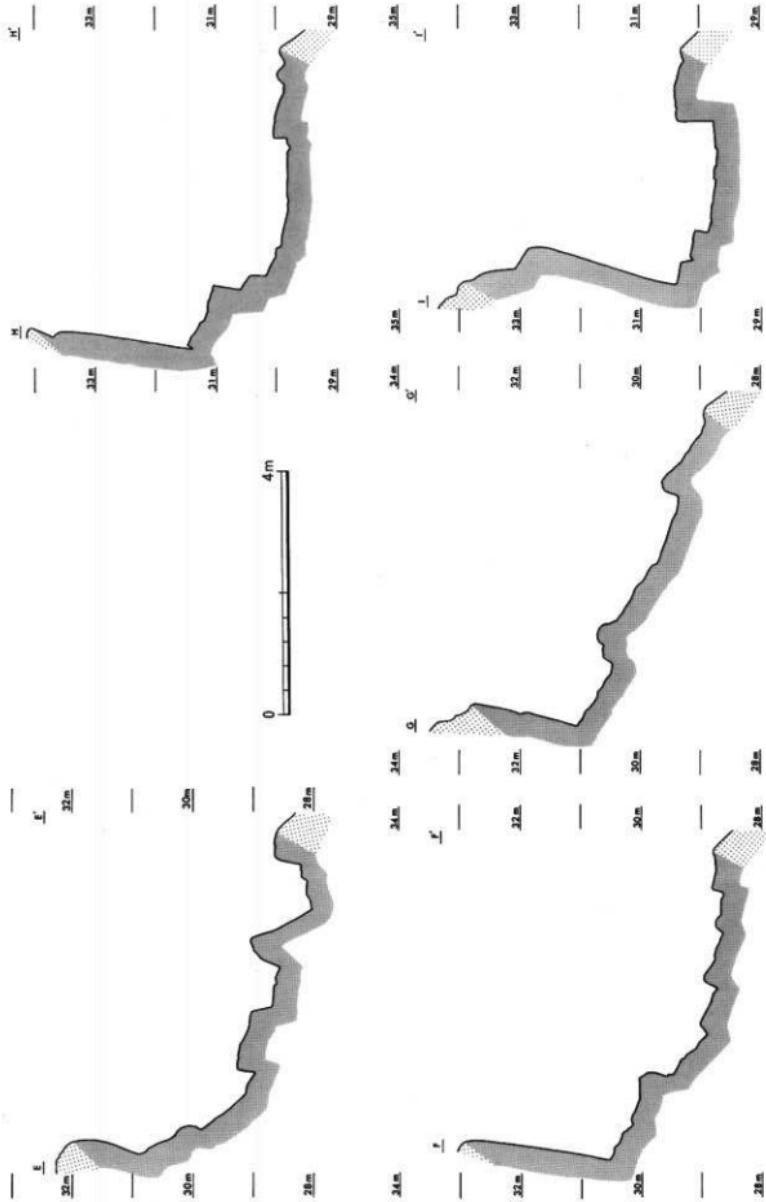
第4図 石切場跡V平面図・立面図 (1 : 80)



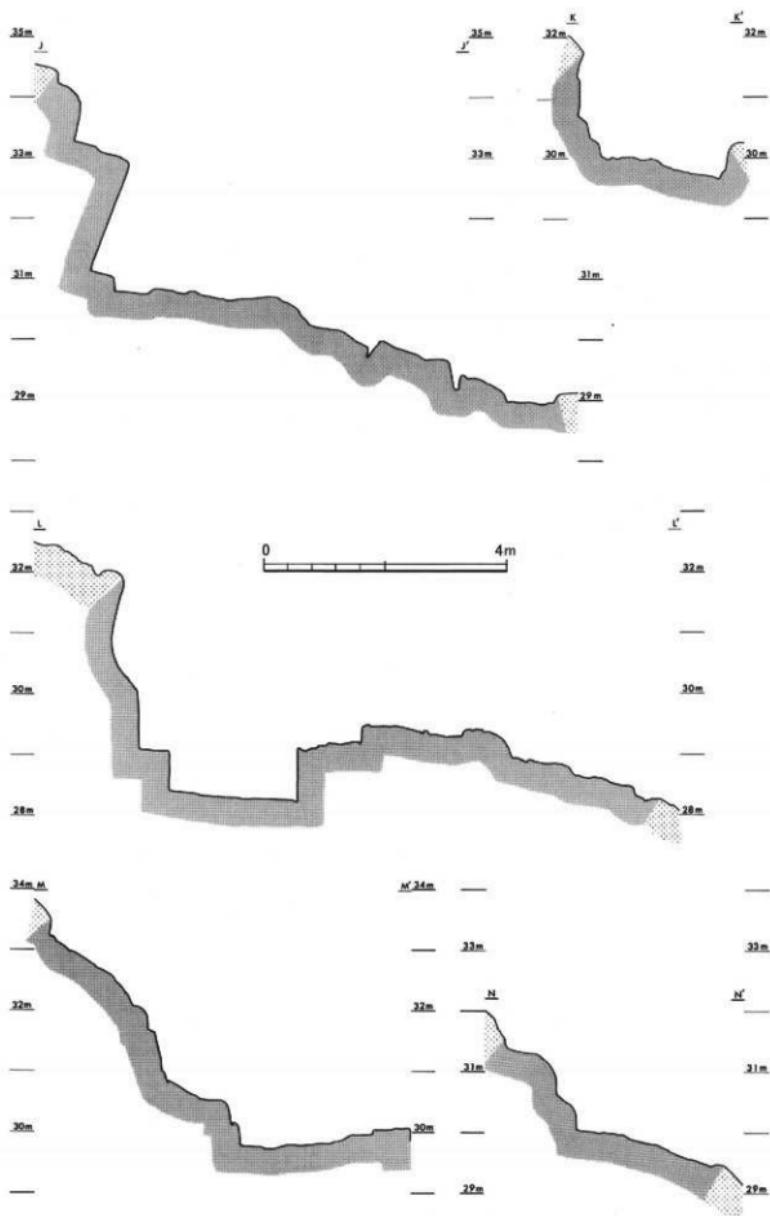
第5図 石切場跡V土層図 (1 : 80)



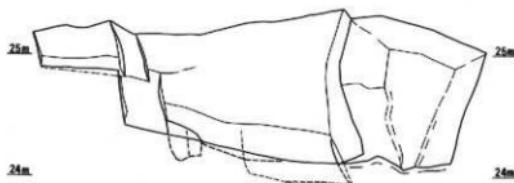
第6図 石切場跡V断面図その1(1:80)



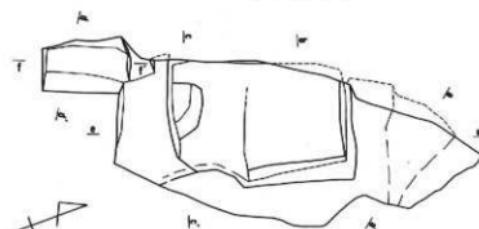
第7図 石切場跡V断面図その2 (1:80)



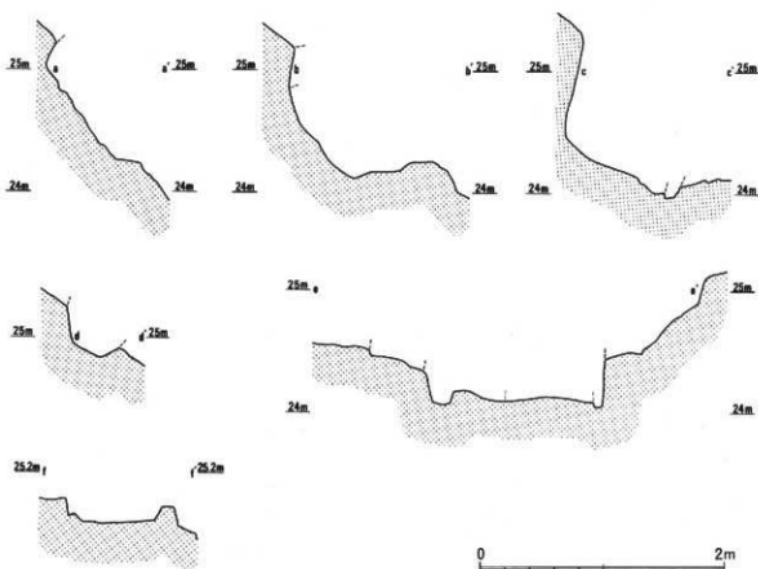
第8図 石切場跡V断面図その3 (1 : 80)



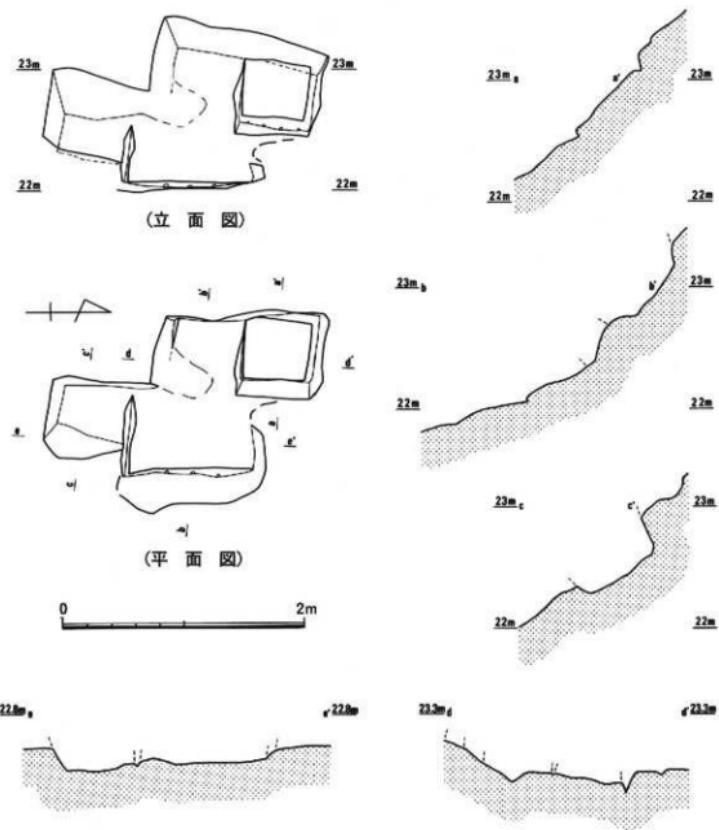
(立 面 図)



(平 面 図)



第9図 石切場跡VI遺構図 (1 : 40)

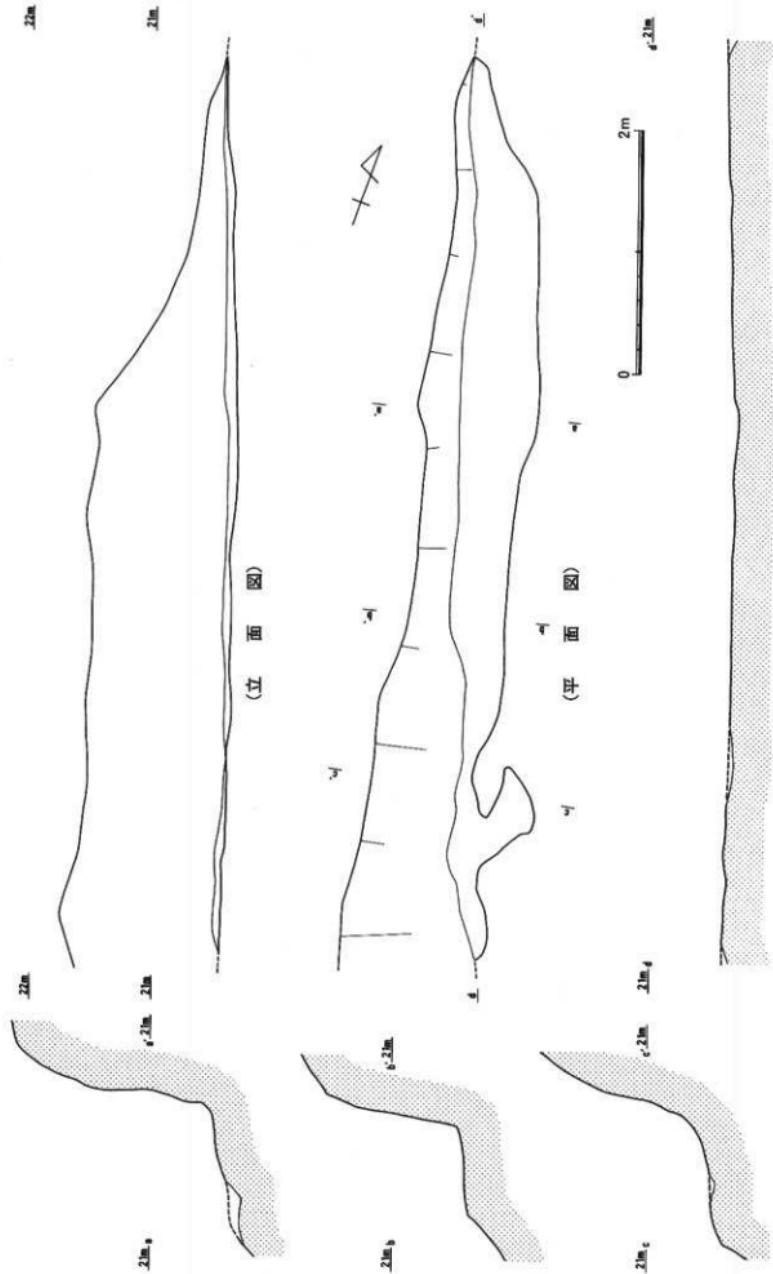


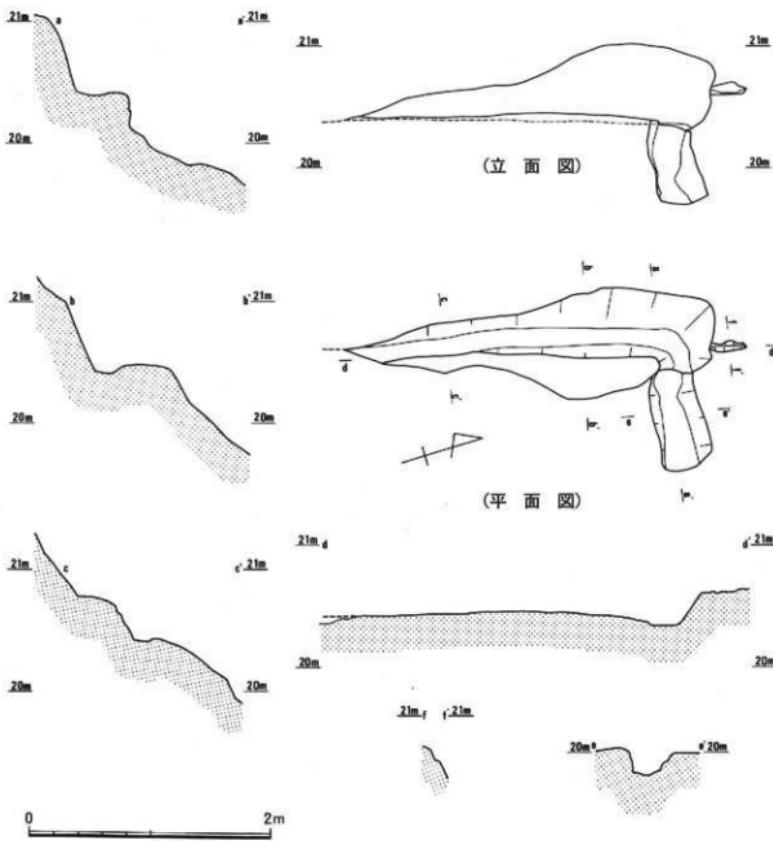
第10図 石切場跡VI遺構図 (1 : 40)

### (3) 石切場跡VI

3カ所の石切場跡のなかでは最も低い位置にあり、VI地点と同様、切り出し面は凝灰岩帶のほぼ下端に位置する。既述の石切場跡V・VIと同様、方形の石切跡で、東西幅が最大で2.3m、縦方向には斜高1.7m、垂直高1.4mと、VIよりさらに小規模である(第10図)。ツルハシ状工具とヤの跡が残り、V・VI同様の石切技法と分かる。判明するものでは、その大きさが50×50cm、80×100cmである。岩盤面に対して垂直方向にほりこまれるが、最も深いところでも30cmにも満たず全体に浅い。ヤの跡が削肌面よりも下位に残ることなどから考えても、石切にはあまり適さないと判断されて小規模にとどまったものと推定される。出土遺物はなく、時

第11図 加工段1断面図 (1 : 40)



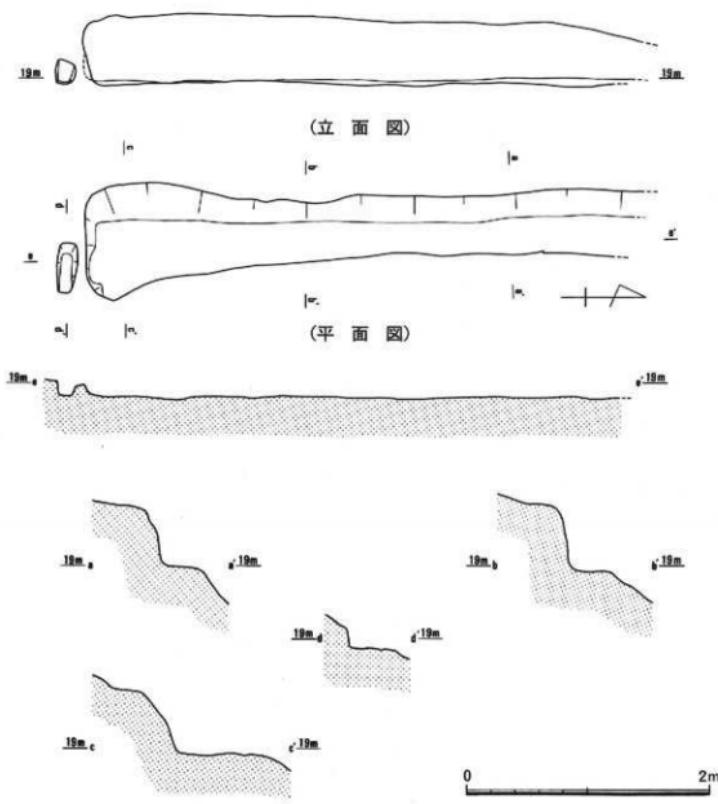


第12図 加工段II遺構図 (1 : 40)

代は特定できないが、V・VI同様におよそ近世のものと考えられる。

#### (4) 加工段状遺構 I

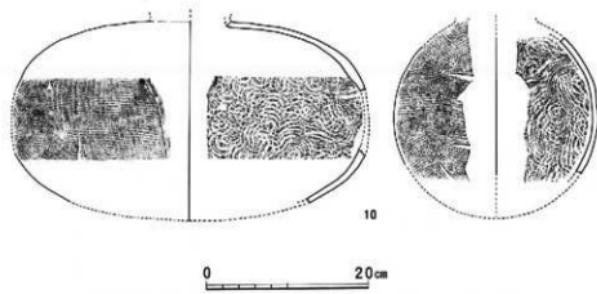
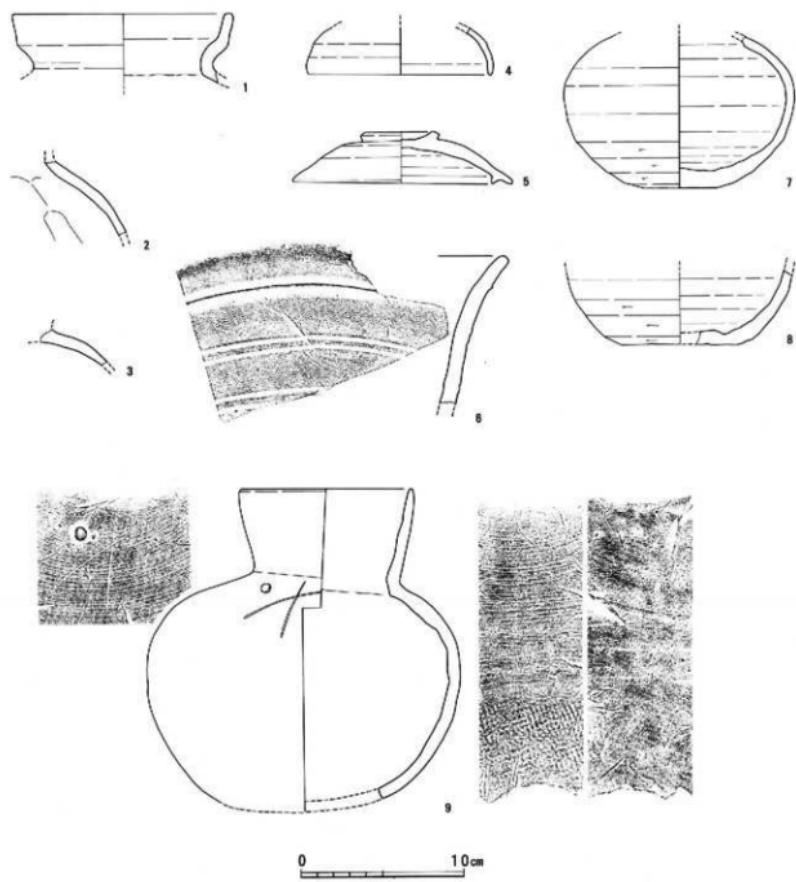
長さ 7.3m にわたって細長い平坦面を造り出した岩盤加工の段状遺構である（第 11 図）。現状では幅が北側で最大 65cm ある。南側は風化し壊れてはいるものの、ほぼ同じ幅であったと推定される。山側では高さが最大 1.5m 剥削され、傾斜角が約 80° か、ほぼ直立する。床面はほぼ水平に削られ、岩盤斜面に沿ってほぼ南北方向に向いている。伴出遺物もなく、遺構の性格・時期ともに不明であるが、床面に残った刃幅 5cm ほどのノミ痕からすると、古代の遺構である可能性が考えられる。



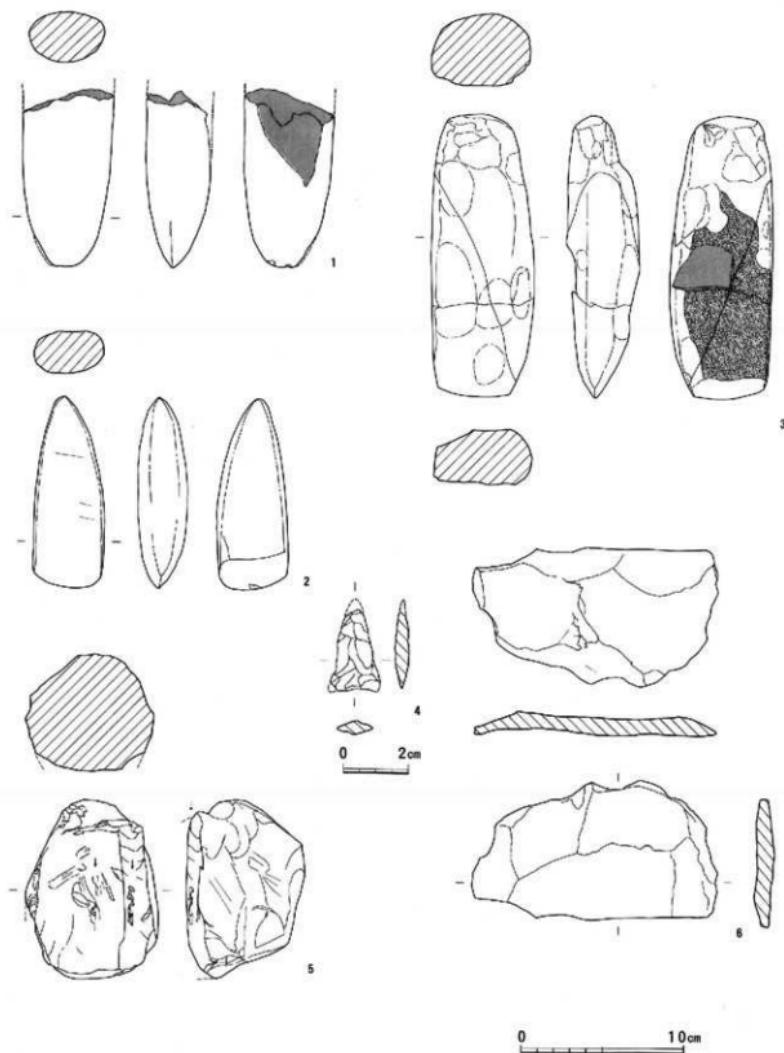
第13図 加工段状造構図 (1 : 40)

##### (5) 加工段状造構 II

加工段 I からは北側に 2 m 離れて存在する岩盤加工の段状造構である (第 12 図)。南北の長さ 3 m、中ほどでの幅は最大で 60 cm、山側での高さは最大 60 cm あり、壁面は約 75° の角度で立ち上がる。加工段 I と同様、ほぼ水平な床面を有する造構であるが、北側では鉤の手に曲がり、床面の山側には幅 20 cm ほどの溝が巡っている。また、北端ではこの床面および周溝を壊すような形で縦方向の溝が掘られている。斜距離で縦の長さ 80 cm、幅は上端が 35 cm、下端が 20 cm、深さおよそ 20 cm である。さらに、北端の壁面にこれと直交するように断面 V 字状の浅



第15図 白石谷遺跡出土遺物実測図その1 (2:3、1:3)



第16図 白石谷遺跡出土遺物実測図その2 (1:3、1:4)

く小さな溝が掘られている。長さ30cm、上幅10cm、深さ5cmである。

造構のあるレベルは、加工段Iとほぼ同じであり、あるいはこれと一連の造構であった可能性も考えられる。伴山遺物もなく、造構の性格は不明であるが、時期的には北端の縦方向の溝が加工段を切り合うようにして認められたため、前者が後者より新しい造構と考えてほぼ間違いないと思われる。また、前者の造構はやや雑でツルハシ状の工具で掘削された痕跡が残り、逆に後者は掘削が丁寧で刃幅5cmほどのノミ痕が認められたことから、前者が近世の、後者が古代の造構である可能性が考えられる。

#### (6) 加工段状造構III

検出した造構中、最も下位に位置し、南北に細長い岩盤加工の段状造構である(第13図)。現存確認長で4.5m、幅は北側で30cm、中央で25cm、南側で65cm、山側では高さ最大で50cmで、ほぼ垂直に削られている。床面は水平であり、造構は北側にさらに伸びそうである。南端は谷側に向かって直角に折れて終わるが、これより15cmほど距離を置いて、岩盤面に対して直交する小さな溝が付属している。溝は長さ40cm、軸が上端で16cm、下端で9cmであり、底面は加工段と同じレベルである。伴出遺物はなく、性格・時期とともに不明であるが、既述の加工段状造構I・IIを参考にすれば、古代の造構である可能性も考えられる。

### 3. 出土遺物の概要

白石谷遺跡から出土した遺物には、土師器、須恵器、鉄製品、石器類があり、出土量は僅かである。鉄製品は石切場跡の堆積層から、それ以外は谷部の遺物包含層から出土した。

第14図1・2は矢と呼ばれる鉄製のクサビである。1は全長10.8cm、刃幅が2.0cm、中央部最大幅が2.9cm、基部平坦面の幅2.2cmがあり、刃部から中程までは断面長方形であるが、それから基部にかけては面取りされて断面八角形状になる。基部は使用のため捲れが生じている。2は小型のクサビ(豆矢)で、全長4.1cm、刃部幅1.1cm、基部幅が2.1cmで、断面は長方形を呈している。

第15図1～3は土師器で、1は複合口縁部で、調整は内外面とも風化のため不明である。2・3は頸部から肩部にかけた小片で、内面はヘラケズリの痕跡がみられる。4～10は須恵器であり、4は壺蓋の口縁部で、天井部と体部との区別のない、山陰須恵器編年第IV期の特徴を持つものである。5は輪状つまみの付く壺蓋で、内面にかえりをもち、同じく山陰須恵器編年第IV期の特徴を有する。7・8は長頸壺の底部片とみられるもので、底部外面は平底、下半部は回転ヘラケズリが施されている。9は半瓶のほぼ完形品で、外表面調整は胴部上半部がカキ目、下半部が格子状のタタキ目が施されている。内面調整は上半部が回転ナデ、下半部が同心円状タタキ目である。頸部近くの胴部肩に耳の退化した小さな円形浮文が付き、X状のヘラ記号が記されている。底部は焼成後に打ち欠いて孔があく。10は横瓶で、胴部の破片である。調整は外表面が格子状タタキ目、内面が同心円状タタキ目を残している。

第16図は石器類であり、1～3は磨製石斧、4は石鎌、5は残核、6は剥片と考えられる。1は両刃石斧で刃部は丸く急激な弧を描く。現存長10.8cm、最大幅2.0cmで基部が欠損する。2は長さ11.3cm、刃幅4.1cm、最大厚3.0cmで、刃部は両刃で直線を呈し、基部は先細りする。3は刃部のみ加工した局部磨製石器で、断面や閣丸方形を呈し、刃部は両刃で直線に近い。最大長17.1cm、最大幅6.1cm、刃幅4.2cmである。4は安山岩製の石鎌で、現存長2.5cm、基部幅1.5cmであり、

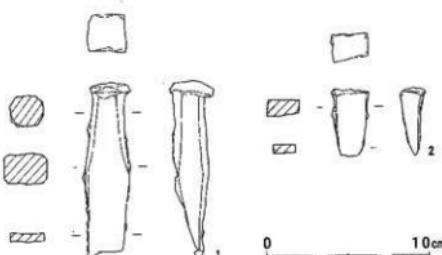
先端部を僅かに欠いている。5は残核と考えられ、縦方向の剥離面が観察される。6は安山岩製の剥片と考えられる。

#### 4.まとめ

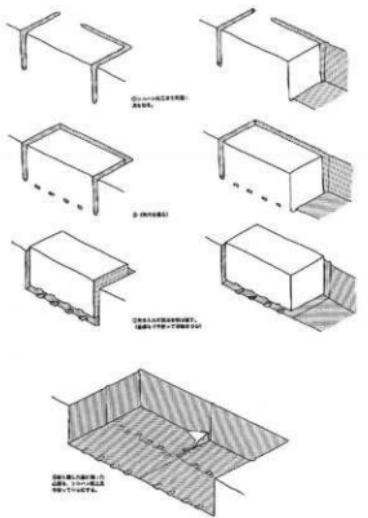
発掘調査の結果、白石谷遺跡では石切場跡3、加工段状遺構3の遺構が認められ、上師器、須恵器、鉄製品、石器類の遺物が出土した。

石切場跡はおよそ近世の遺構とみられ、加工段状遺構は時期は特定できないないが古代の可能性が考えられる。

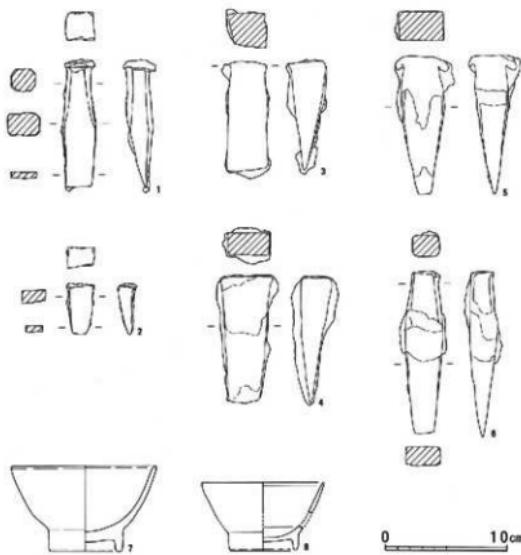
石切場跡については凝灰岩の露天掘りの跡である。その切り出し手法を復元すると、ツルハシ状工具により周辺に溝を切り、最後底面をクサビを打ち込んで割り離すというものである。大井谷石切場跡I～IV地点と同様、当地方における軟質系の石切技法を知る上で貴重な資料が得られたものと思われる（第17・18図参照）。



第14図 石切場跡V出土遺物実測図（1：3）



第17図 大井谷石切場跡群石切り工程復元模式図



第18図 大井谷石切場跡群 I ~ VI出土遺物実測図 (1 : 4)



白石谷遺跡調査前全景（南から）



同 上（北から）



白石谷遺跡石切場跡調査後全景（東から、白色部分が凝灰岩帯）



同上遺跡谷部調査後全景（北から）



石切場跡 V 調査前近景（南東から）



同 上（北西から）